

ミュンスター再洗礼派千年王国と一夫多妻制

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学社会科学研究所 公開日: 2012-05-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 倉塚, 平 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/12640

ミュンスター再洗礼派千年王国と一夫多妻制

倉塚 平☆

Das münsterische Täuferreich und die Vielweiberei

Taira Kuratsuka

はしがき

- 第1章 客観的条件 男女比のアンバランス
- 第2章 主観的条件
 - 1. キリスト単性論
 - 2. ヤン・フォン・ライデン
- 第3章 研究史的回顧
- 第4章 一夫多妻制の実態
- 第5章 試論的問題提起 誰がいかなる意図で一夫多妻制を導入したのか
- 補論
 - 1. 一夫多妻制に関する諸説の紹介
 - 2. ヤン・フォン・ライデンの二つの自白調書

はしがき

1534年2月末に出現し、翌35年6月の落城まで帝国諸侯軍の包囲下で戦い続けたミュンスター再洗礼派王国は、古今東西の千年王国運動の中でも最も典型的に開花したものであった。そこでは政治・経済・家族・文化などのあらゆる領域で、まさしく謝肉祭のドンデン返しとでもいうような無茶苦茶な大変革が行われた。既存の一切の制度は背神的デッチ上げであるとして、それを廃棄し、神の「預言」に基づいて、政治的にはヤン・マチスのカリスマ的支配から発し、ヤン・フォン・ライデンのダヴィデ王朝樹立に至る。経済的には、貨幣も売買も廃棄され、財産共有制（共同食堂、現物支給、貴金属、生活物資の供出と摘発）が強行された。「御言葉は肉となった。そして、われわれの中に住む」(DAT WORT IS FLEISCH GEWORDEN VN WANET VNDER VNS.) だから聖者は罪を犯すことはないという狂気の自己正当化のもとに既存の道徳基準も転倒される。聖書を除く一切の書物や文書も焼却され、街路や出生児の名前もアルファベット順に変えられた。要するに聖俗諸侯に包囲されたこの都市空間の中で、この世に対する激しい怒りと絶望、そして差迫った神の国出現への熱烈な期待を心理的発条として、まさしくこの世の国から神の国へ、歴史的時間からメタヒストリカルな時間へ向けて約八千の男女再洗礼派による飛翔が現実に試みられたのである。

だが空高く舞上がったと思った彼らは、予期に反して地に落ちるところが、地獄の底まで落ちこんでしまった。この世の国の掟やモラルを廃棄した集団の中でそれぞれ聖者として振舞うことなど不可能であった。この世のモラルを捨てた結果、赤裸々な我欲が噴出する。その行きつくところは、最も狡猾残忍で、ひとかけらの人情もない男が人々を威圧し、王となり、あらぬ解放の希望を与えて人々を操作し、時には人前で捕虜や裏切者の首を刎ねて人々の肝を潰し、全身を宝石と金細工で飾りたてて威厳を示し、十数人の美女を妻妾にして、豪華な宮廷を開くことになった。だが、再洗礼派王国が今にいたるまでひどくスキャンダラスなものとして語り継がれることになったのは、彼が導入した一夫多妻制 Polygamie, Vielweiberei のためであった¹⁾。彼の支配の下に男どもは1日の三分の一は戦闘・訓練や土塁作りや石材運び、夜は哨所勤務で酷使されていたが、その対価として、欲しいだけの女を妻として手に入れるように仕向けられた。ちなみに市内の男女比は一年数ヶ月のこの王国期間中、時期によってはかなり異なるが、ほぼ1:3.5であった。多くの男は、女たちの掴み取り競争に加わり心を失っていく。やがて飢餓が襲いはじめると、正妻だけを残し、やせ衰えた他の女たちを包囲軍のもとに送り出すことになる。今度は傭兵たちが彼女らを頑具にする^{2) 3)}。この世のデングリ返しに喜んで参加した者たちの中には、遂には激しい飢餓のため人肉に手を出すものさえ現れてきた⁴⁾。

再洗礼派がこの市の権力を握った1534年2月末から1年半後の1535年6月、市内からの逃亡者に導かれた諸侯軍により市は陥落し、捕虜となった「国王」ヤン・フォン・ライデンと二人の仲間はプリンツィパル・マルクトで残酷な処刑を受け、傍に聳え立つランベルティ教会の尖塔に曝された。今もその鉄の檻は吊るされている。

筆者はこのミュンスター千年王国運動の歴史について、ことにその前史について長らく論じてきた。

例えば、『政経論叢』I. vol. 47 no. 1, II. vol. 47 no. 2-3, III. vol. 47 no. 5-6, IV. vol. 50 no. 1, V. vol. 52 no. 3-4, VI. vol. 53 no. 1, VII. vol. 53 no. 4, 5, 6, VIII. vol. 54 no. 1-2-3, IX. vol. 56 no. 5-6 等である。従って、ここでは当時耳目を衝動させ、今に至るも嫌悪の眼で眺められている一夫多妻制の問題に取り組んでみたいと思う。なぜなら、多くの研究者によって試みられているが、その導入の問題について今に至るも明快な説明がなされていないことにある。千数百年にわたって培われてきたキリスト教世界の人間関係の根本的土台を、なぜ彼らは破壊しなければならなかったのだろうか。まずそれを可能にした客観的条件、すなわち、なぜ男女比のアンバランスが生じたかということから見ていくことにしよう。

第1章 客観的条件 —男女比の大きなアンバランス—

いちばん熱心にミュンスター再洗礼派の研究をしているベテランの K. -H. Kirchhoff の „Die Täufer in Münster 1534/35”によれば⁵⁾、その概数は次のごとくである。もともと1年半の間に人口はかなり大きく増えたり減ったりしている。従って、平均値を出すのはあまり意味がなさそうではある。

男 (戦闘能力ある者と老人・若年者) 1500 - 2000 平均値 1755

女 2000 - 6000 平均値 4800

子供 1000-1200 (幼児と学童; 平均値 1200)

以上の全平均値 7755 人、同時代人の評価も 5000 から 9000 の間に散らばっているとのことである。

これらの数字の中にはかなりの割合で外からの移住者が入っている。二・三の訊問調査では、7~800 人の戦闘能力ある男とそれに倍する 2000~2500 人の女の移住者がいると書かれている。新たに成立した再洗礼派市参事会により 1534 年 2 月 27 日追放された非再洗礼派 (カトリックとルター派) の市民 2000 人を差引いても、少なくとも再洗礼派ミュンスターには、800-1000 人の戦闘能力ある男 (そのかなりの部分は外来者)、3000-3300 の女 (そのかなりの部分も外来者)、1200 の子供がいたといえる。それは 7000 ~8000 人と評価される在俗者の 62-68%に当る。だがさらにミュンスターには 159 の Nebenhäuser (Gademe 一部屋だけの家)の一部は借家になっていた。また下僕 Knechte や下女 Mägde 1200-1500 人も加えなければならぬ。このように計算していくと、だいたいミュンスター市のふだんの人口か、それをやや上廻る人口数が出てくるという。要するに、いちばん問題なのは、多数の成人男子が再洗礼派に加担して戦争することから逃れるため、妻子や下女を家に置いて後事を托し、市から脱出したことである⁶⁾。

さらになお日頃は自覚されることはないが民衆の心の中に深くしみこんでいる終末の日に対する恐怖が、ミュンスターからの呼びかけで、マルコ福音書 13 章に見られるような慌だしい家族の分裂と主として妻子のミュンスター流入を惹き起こしたのである。これについて Dorpius は次のように書いている。

「再洗礼派は平和以外のなにものも約束しないといていた。だがロートマンは再洗礼派の指導者クニッパドルリンクとともに、周辺の都市ケースフェルト、デュールメン、ハム、ゾースト、ヴァーレンドルフ、オスナブリュックの再洗礼を受けた者やその信仰の友たちに秘かに手紙を送って、彼らがもてる一切のものを、すなわち家や屋敷や妻や子を捨てて、急いでミュンスターに来るようにいった。彼ら

が捨てたものは10倍にもして返されるであろうと。このような厳しい警告と慰めに満ちた約束によって、彼らは向う見ずになった。また妻は夫を、夫は妻を捨ててやって来た⁷⁾。」ミュンスター再洗礼派では、信仰を異にする夫や妻は妻でもなければ夫でもない相手を見なすが故に、彼らはもはや婚姻の絆に縛られない、自由なのであると。強制的に押しつけられた一夫多妻制を、彼らはいかに及ばず、彼女たちの多くも諦めて、受入れた理由はここにある。もっとも捨てた物を10倍にして返されるだろうと期待したよりも、市に留まった非再洗礼派市民は、状況をあまりに悲観的に眺めて、かえってしくじることにもなる。「暴君の司教や坊主の刃で斬られるよりは、市にとどまって引剥がされるほうがましだろう⁸⁾」と歌って、彼ら同志慰め合っていたとのことである。

かくしてミュンスターでは成人女性に比べてふつう1~1.5割少ない成人男性人口は激減する。ついで外から、ことにオランダやフリースランドから多数の再洗礼派が官憲の網目をくぐってミュンスターにやってくるが、そのうち女性は男の2倍以上とキルヒホフは見ている。筆者もオランダのザイデル海一帯から1534年3月聖都ミュンスターめがけて船出した人々のことや、ミュンスターラントから説教者に連れられてミュンスターに行った人々の訊問調査を見たが、やはり女性がかかり多かった。他の再洗礼派諸派についてもこれがいえそうである。もしそうだとすると、なぜ女性が危険を冒してまで再洗礼派を支持したのだろうか。ネーデルラントや北西ドイツでは、他の地方と同じようにカトリック教会の腐敗墮落に民衆は怒りまた軽蔑していたが⁹⁾、まだルター派はこの地に滲透していなかった。その中にあって迫害されながらも「神の言葉」を無抵抗で語りつづける彼ら再洗礼派に対して、同じ社会的宗教的弱者としての女性たちが共感の念を深く抱いていたことは当然だったかもしれないが、なお詳しく検討する必要がある。

この女性の数がだいたい男の3~3.5倍であり、しかも敵軍に包囲された孤立した世界であったこと、これが一夫多妻制を、暴力的にはあれ、可能にした客観的条件なのである。

第2章 主観的条件

I. キリスト単性論

指導者の主観的条件として挙げなければならない神学的問題は、独裁者だったヤン・マチスもヤン・フォン・ライデンも、またそのイデオログだったロートマンもメルヒオール・ホフマンの神学的影響下にあったということである。ことにホフマンのキリスト単性論 *Monophysische Christologie*¹⁰⁾は女性の人格を認めず、たんに生殖の手段と見なすことになっていく。まず簡単にいうと、キリスト単性論は、論理的にはキリストの神性、至上性の強調から始まる。そうなるとマリアを主の母、神の母などと見なす伝統的な神学は神冒瀆以外のなにものでもなくなってしまふ。だから聖霊がマリアの体内に宿って胎児となり赤児として生れ出た、すなわち、父なる神と母なる人間マリアとの霊肉結合物としてキリストを見る考え方は、間違いだということになる。愚かなる人間のために神は人間の形をとって世に姿を現わされたが、その際、パイプから物が出るようにマリアを通過されたので、人間的要素をマリアからイ

エス・キリストはなにも撰られなかったと主張する極端なキリスト単性論が出てくる。こうなるとキリストは神そのものと同一化され、再洗礼派王国時代キリスト礼拝はしなくなった。これをやや中和した形としては、聖霊はマリアの胎内に受胎して栄養を撰ったが人間的要素は撰らなかつた、「キリストはマリアの種から成長したものではない¹¹⁾」と主張する単性論派もでてくる。ロートマンがこの立場であった。それで再洗礼派がまだ権力を握る以前、彼の説教に対してある信徒がこう反駁した。「キリストがマリアの胎内から栄養をとって大きくなったというなら、キリストはやはり人間になったのではないか？」これに対してロートマンは激怒してこういった。「馬鹿なことをいうな！お前たちも牛乳で育ったり牛肉を食べて大きくなったが、牛にならなかつたのと同じことだ！」

この時代、生理学はまだ生じていなかった。動物は精子と卵子が結合してメスの胎内で育ってから出産するということがよくわかっていなかった。むしろ、種子と畑の関係をもって動物の生殖を説明するという農民的繁殖観が用いられていた。すなわち種子 Saat を子宮という畑に注入すると、それが畑すなわち胎内で栄養を吸収して大きくなって出産する。要するに、女の腹は借り物であり、もし主なる神が「生めよ殖やせよ地に満てよ！」と命じられるならば、できる限り多くの女の腹に Saat をバラ撒かなければならないということになってくる。もっとも男だけに Saat があるのではなく上述のように女にも Saat や Samen があると人々は思っていたらしい¹²⁾。ともあれ、神から始まる価値のヒエラルヒーの中で、男は女に絶対に優位する存在たることを、キリスト単性論は帰結してしまったのだ。

ところで、すでに再洗礼派王国以前の 1534 年 1 月中旬の時点で、カトリック官憲が再洗礼派の主張をまとめた「ミュンスター・アルティケル（箇条書）」なるものが作られた¹³⁾。そこにはキリスト単性論がはっきり現れている。例えば、「第 10 条 神（キリスト）は人間性をマリアから受取らなかつた。」「第 13 条 妻は信仰者である夫をヘルと呼ばなければならない。」「これはヤン・マチスがヤン・フォン・ライデンに命じてミュンスターに行かせ、教会をプチ壊すこと、妻は夫をヘル（主人）と呼ばせることを命じた時のことである（C. 371）。」「第 12 条 信仰者すなわち洗礼を受けた者と新たに結婚しなければならない。」「従って、既存の結婚は一方が信仰を異にすると彼らの立場からするなら自動的に消滅するということになる（NUS. 160ff）。間もなく 2 月 9、10 日事件が起る。これは再洗礼派とルター派とが対立し、ユーヴァーバッサー教会の傍を流れる小川を挟んであやや武装闘争に至らんとした事件であるが、その際市内をくまなく走り廻り、また「きつつきのように」自分の家の二階から仕立屋の父と 16 才の娘がアジリまくったことがある。彼らはこういつている。「悔い改めよ！悔い改めよ！キリストが処女マリアの血と肉からその人間性を受取ったと信ずる輩よ、汝らには永遠の断罪とたえざる責苦が待ちうけているのだ。」（Ker. 485）

このようなキリスト単性論が、ミュンスター再洗礼派体制の公認イデオロギーとなった結果、戦闘や塹壕掘り、教会堂崩し、放牧などを男同様にやらされながら女性の地位は見る間に低下させられて行く。重労働だけでなく生殖や享楽の手段と見なされ、女性の数の多さと相俟って一夫多妻制の中に彼女たちは突き落とされていくのだ。

II. ヤン・フォン・ライデン

主観的条件の第二番目のものとして挙げられなければならないのは、ヤン・フォン・ライデンなる者の人格である。ヒトラーという人物を除いてナチズムを語るができないように、ヤンを除いてこの王国も一夫多妻制も語ることはできない。多くの論者は、人口一万人近くの町の人々をいかに男女比の差が大きかろうと、一人の人物が一夫多妻制にもちこんでいくことは不可能であるといっている。しかしそれはしっかりと確立しているこの世の秩序を前提としてのことであって、「終末の日は近い、イエス・キリストはこの市に再臨される」と信じ、その時、神の恐ろしい審判から守られるためこの市に多数の外来者が続々と乗りこんできて、旧市民をまきこみ一種の終末期待共同体をつくり上げていった状況では、既存の社会的倫理的束縛はバラバラに解体してしまう。この終末期待共同体では、預言者と称し、かつ人々からそう目されている人物の一語一語が、世の常識からするならば、いかに出鱈目なものであれ、刃のような鋭さで、人々の心の中に喰込んでいき旧秩序に取って代るのである。

ヤン・フォン・ライデンが一夫多妻制の導入を指導部の会議で提案したとき、説教者や指導部のメンバーはすべて反対した。だが怒り狂った彼はすさまじい勢いで反駁する。すぐれたヘッセンのルター派牧師アントニウス・コルヴィヌスは、聞取調査に基づいて Dorpius という偽名で翌年出した長文のパンフレットで、次のようにその事件を彷彿として浮かび上がらせている。

「ヤン・フォン・ライデンは自分が指名した 12 長老を集めて、ある箇条書を渡し、反駁し突き返してみよといった。要旨は男は妻に縛られてはならない。欲するだけたくさんの女と結婚してよしいということであった。説教者たちはこれに反対し、決して認めようとはしなかった。それでこの預言者ヤンは十二長老と説教者たちを市参事会館に呼び入れ、上着を脱ぎ、新約聖書を手に取り、ついでそれを地上に投げつけ、この箇条が正しいことの証拠にしようとした。そして父なる神は自分にそのことを啓示されたのだといった。さらにこれに反対した者たちを脅し、お前たちにはもう神の恩恵はなくなったといった。説教者たちは遂に預言者と結婚について一致し、三日にわたって結婚についてドーム広場で説教した。それから間もなく預言者は三人の女を妻にした。その一人はかつての預言者ヤン・マチスの妻であった。彼女は今後、妻たちの最高の者とされた。他の者も預言者に従いだし、大多数の者が複数の妻をめとった。一人の妻だけをもつ者が最善の男のはずだが、ひどく軽蔑された」¹⁴⁾。

またヤン・フォン・ライデンと指導部の一夫多妻制をめぐる会議の席上にいた説教者クロプリス¹⁵⁾は、やがてオルグに出されて逮捕され処刑されるが、彼は訊問調書でこう語っている。「議題は全世界を支配するような王国を神はどのように樹立されんと欲せられているかだったが、ヤン・フォン・ライデンは『問題は諸君がその教義をどのようにつくるかだ。しかしミュンスターの説教者たちは全がマインデとともに、多くの女に対して快楽を求めることに反対しているとな?! では聖書をもとにそれをお前たちに証明してやろうと。』そして彼が喋ったことを皆が守るように押しまくった」(NUS. 122)。だが彼はヤンの呪文が解けておらず、次のように訊問官に語っている。「王ヤン・フォン・ライデンは三十歳を超えてはいないが、聖書についてすばらしい知識をもっており、彼はその雄弁をもって民衆を感動させ、彼の信奉者にさせている。¹⁶⁾」またこうも断定している。「預言者ヤン・フォン・ライデンが一夫多妻制を

ひとりで始めたのである。しかし、当初他の者はそれに反対であった。¹⁷⁾

当時ニュールンベルクの画家デューラーに次ぐすぐれた絵描きとして知られていたミュンスターラント出身の Aldegrever は、再洗礼派王国にたいへん興味を抱き、ヤン・フォン・ライデンを初めとして多くの人物の版画を彫った。ところがそのヤンの顔が知的であまりにもハンサムであったため、この画家兼彫刻家に、再洗礼派の一員ではないかという嫌疑がかけられてしまい、数世代たっても「隠れヴィーダートイファー」という汚名がつきまとった¹⁸⁾。確かに今も残っているヤンの顔はよく描けていて実物以上だという気がしないでもない。遠くを見つめているその眼は、起りつつある現象や人の心の奥底を見透かしているかのようである。また内に闘志を潜めた精悍な面魂はことに異性の心だけでなく同性の者たちをも、その膝下に跪かせるほどの迫力をもっているように感じられる。

ところが彼の惨めな自白調書（後出）を見ると、ネーデルラントで自分が歩き廻り、洗礼した人々の名前や場所を平気でこともなげに曝露している。彼にとっては信仰などは、実はどうでもよいことだったので。ひとたび口先三寸で思うがままに人々が自分のハツタリを信じこむのを見ると、人間はすべてどうにでも左右できる道具にすぎない……およそ人々の人格を尊重することなど愚の骨頂だという徹底したシニシズムの持主となってきたのだ。15 人もの美女を自分の宮殿に（実はハレム）に蓄えており、そしてゲマインデ集会を開くときには、男女、市民、傭兵たちの前に、彼女たち全員をしやなりしやなりと引き連れて、悦にいつて現れてくるこの男を見ると、再洗礼派のモラルの一片すらもっていないことがわかるであろう。ヤンの目的は包圍する諸侯軍に打ち勝って、あるいはミュンスターから脱出して、再洗礼派を使って自分の王国を作ることにあつたのだと推測される¹⁹⁾。再洗礼派は彼にとっては、ただそのための愚かなる道具の群にすぎなかつたのだ。もっとも道具の中の道具であるはずの女が、しかも自分の 15 人の妻妾の一人、金持の呉服商の娘であつたエリザベートが指導部の連中ですら吐かなかつたような批判的な言葉を吐いたことがある。「この市の人々が飢えに苦しんでいるのに、私たちだけがこんな贅沢をしていてもよいのでしょうか²⁰⁾」と同じ年頃の妾にされている娘数人に向つて良心的発言をしたのだ。その中の一人がヤンにそれを密告した。ヤンは激怒し、妻妾たちを広場で円を作って歌い踊らせながら、その環の中でヤンはみずからエリザベートの首を斬り落とした。かわいらしい「道具」と思つていた娘が、こともあろうに自分を道徳的に非難していると思ひ、頭に血がのぼつたためであろう。またヤンはクニッパードルリンクの自白調書によれば、「少女凌辱の発頭人であつた」(C. 379)。これだけ語ればヤン・フォン・ライデンなるものの人物がわかるであろう。

しかし、市内では餓死しながらも、彼に対する反抗は遂に起らなかつた。なぜなら、一夫多妻制を強行的に導入した数日後（1534. 7. 29）、前年度の全ギルド会議議長であつたモルレンヘッケを中心とする市民と傭兵の 200 人が、ヤンを始め一夫多妻賛成派の大物たちを逮捕し、司教側に全面降伏しようとしてクーデターを起こしたことがある。だが戦術的な拙劣さのため敗北し、47 人も処刑された(G. 71-73)。その処刑の仕方はおそろべき恐怖を人々の心の中に叩きこんだ。ドーム広場で行われた処刑は、数日かけて行われたがグロテスクそのものであつた。射殺、斬殺、刺殺、毆殺、撲殺などなど、それは残忍な殺しの実験室のようなものであつた。今でも大聖堂広場のあちこちを掘れば、無念な想いを残して虐殺

された人々の骨が出てくるであろう。なおこの蜂起派鎮圧に当っては、ケルセンプロッホのみが伝えるところによれば、ラートハウスの中に逃げこんだ蜂起派に対し、女たちが大砲を引いてやってきて、その中に撃ちこませたということである (K. 623)。この女たちは何者なのか。どういうつもりなのか。もしケルセンプロッホの記述が正しければのことだが。

1534年8月31日、包囲軍の第二次総攻撃をヤンは見事に挫折させた。彼は軍事的経験をもっていなかったが、戦術はすぐれていた。状況に応じてつねに新しい方法を考え出している。このとき攻撃側は千人の戦死者、再洗礼派は僅か15人か16人だった (NUS. 133)。この勢を駆ってヴァーレンドルフ出身の偽預言者を使ってヤンは王位に就いた。これ以降翌年6月の落城まで、彼は積極策を講じて事態を打開しようとは何一つしていない。ただひたすらネーデルラントから再洗礼派が救出作戦を行ってくれることを期待し、市内の弱り果ててゆく再洗礼派の気を引立てるため、様々な演劇を行うだけであった。外で包囲している諸侯軍に対し、内から総攻撃をかけても結局は全滅すると見ていたのだ。遂に1535年6月脱走したグreshuebeckと傭兵ヘンスケン・ファン・デル・ランゲンストラーテンの建築が包囲軍に容れられて落城となる。ヤンは特別に作られた地下室に隠れていたが、発見されぺらぺら自白し、やがて残酷な処刑を受ける。

第3章 研究史的回顧

一夫多妻制導入の主観的条件として、すでに様々な研究者が語っている。Mennonitische Geschichtsblätter 1983 Nr. 35に Mattias Hennigが „Askese und Ausschweifung,” 副題は「ミュンスター再洗礼派王国における一夫多妻制の理解のために」というそれまでのこれに関する研究を紹介批判しているが、極度に高踏的で難解な文章で、自分でもよくわかっていないらしいことが読みとれる。ここでは五人の説が論じられている。

- (1) 下劣な欲望満足のため。これは当時、ルターたちが怒りにまかせて語った。それが広く受入れられてきた。こんな出鱈目をやらせて人類を神に叛かせようとする悪魔は、よほど馬鹿な奴だ。ABCを習いだした小僧の悪魔か、あるいは Schulmädchen みたいな娘の悪魔がそそのかしたのだらうと (WA. Bd. 38, S. 348)。
- (2) 一夫多妻制の導入は男の脳から出た考え、ことにヤン・フォン・ライデンの性的放縦性にその原因があるとする (上述の註(1) Detmer S. 6)。だが、一人の男の偶然的な性格に、この複雑な問題を還元することは不充分とされることになった。
- (3) 女性の過剰、従って家父長制の中で彼女たちをコントロールする必要性の主張。旧約の家父長たちの一夫多妻制という歴史等々。だがこれらのものはどこにでもあるので、必要充分条件とはいえないとヘンニヒはいう。
- (4) Stayer は Vielweiberei は Ausschweifung ではなく、ウェーバーのいう現世的禁欲が特殊ミュンスター的情况の中で現われた形態であるという。ヘンニヒはこれを高く評価し、従来の説をはるかに高く引き離れたすぐれたテーゼであるという。しかし、この説はおかしい。ロートマンは道徳家ぶって

自己正当化するために次のようにいっている。「多くの妻と交わっても lust をもってはならない。『産めよ増やせよ地に満てよ!』という神の召命を実行する使命が課せられているのであって、そのためにはザーメンを節約しなければならない」(RS. 258-269)。ステューヤーはこの言葉を真に受けて、プロテスタンチズムの禁欲労働とミュンスターの性行動を同質のかつパラレルにとらえているのである。もし彼が一夫多妻制導入後のその実態について少しでも調べていたら、こんなことは書かなかったはずだ。

(5) Seibt 説は「社会的リゴリズムとポリガミーの弁証法的関係」といっているが、このリゴリズムとポリガミーの内的連関の説明が欠けているとヘンニツヒはいい、最後に自分の説としてごく僅かではあるが、David Joris の内面告白、すなわち性的禁欲主義の建前と女性に対する欲求の格闘に彼はいかにやつれ果てたか、最後に、女を何人もとうが、捨てようが、それは信仰と関りのないことだという一夫多妻制肯定に至ったことを引いて、ミュンスター再洗礼派が宗教改革開始以来ひじょうに性倫理について厳格であったが故に遂に無倫理になったと彼はいう。「こういう現象はしばしば起るものだ」そうだ。

(6) Richard van Dülmen は旧約時代のアブラハム、ヤコブ、ダヴィデその他の家父長制的家族主義とプロテスタンチズムの禁欲的道德観の合体したものと見ている。すなわちミュンスター説教者の一人 Dionys Vinne が「もし結婚において肉の快楽や金や財産や美貌が求められるならば、結婚を制定した神の意志に反し空しき売春になる」(NUS. 55) といっているからだという。

(7) Kirchhoff は、なんといっても女性の数が圧倒的に多かった。従ってアナキーに陥らず統治するに当っては、彼女たちをそれぞれの男の下に分配して家父長的家族を作り、これらの男たちを通じて統治する必要があった。だから一人身の老婆も男のところ割当てられた(但し、これは夫婦としてではなく、被護者としてである。G. 68 参照せよ)。それは家父長的家族を通じて生活物資の配給が行われたためである²¹⁾。この説はいちおうもつともだと思わせるが、物資の割当てと一人身の女の割当てをくっつけすぎているように見える(一人身の女といっても、夫が市外や郷里にいる夫人が圧倒的に多いのだ)。このような理由で一夫多妻制を行うためには、剣の脅しの下で男への指名割当てでもしない限り実現不可能である。

実際、女どころか、一夫多妻制を布告した7月23日のドーム広場では激しい論争が起り、一致するどころが大混乱のまま集会は解散されてしまい、一週間後の7月29日には、約200名ほどの男の武装反乱が起り、指導部を一時逮捕するという事態にまで至った。一夫多妻制反対派は下手な戦術のため敗北するが、この反対派を片付けた直後に発生した事態はまるでフリーセックスに近い。男が二人の証人を連れて、ある女性の前に出て、「Wollt Ihr mich haben? Ich begehre Euer」といい、女が Ja と返事すれば、それで結婚は成立し、またその後で別の男が求婚すると、また Ja ということがしばしば起っている。ことにグレシュベックの記事はそうとれる²²⁾。だからこれに懲りて、二人の夫をもった女が見せしめのため斬首されることになる。その理由も旧約から来ている。「同じ畠に異なる二種類の植物の種を撒いてはならない。」また「仲良くできていないなら別れる。」「別れた妻は別の男をとったりした」(G. 74)。フリーセックスに近い一夫多妻制であった。

だが、時とともに男の権力の重圧が彼女たちにのしかかっていったように見える。一夫多妻制が導入

されてから二・三ヶ月後、あまりの反対の声に押されて離婚を望む女は市参事会に来て署名せよという布告を指導部は出したが、これに対して百名が応じた。もし応じたら一夫多妻制に抵抗した本妻たちが入れられている女囚監獄にぶちこまれるかもしれない (G. 65)、あるいは処刑されるかもしれないという恐怖から、なお百名ぐらいが行きたくても行けなかったということである (G. 68)。

第4章 一夫多妻制の実態

ここでは女性たちに重圧がすっかりのしかた頃の実態をいくつかの例をとって見よう。

1535年2月14日 Zillis Leitgen の自白 (NUS. 136 f) 「私は一度 Knippersche とよばれる Meistersche のところで若い娘が手当てをうけているのを見た。」 Werner Seiffert は 1535年12月11日こう自白した。「ひじょうに多くの若い娘が年頃にもならないのに、男たちをとるように強制された。彼女たちがおとなしくいうことを聞いた後、その体と健康はすっかりメチャクチャになり、クニッパーシェンのところに連れて行かれた」 (C. 295)。ヤン・フォン・ライデン自身もこう自白している (1535. 7. 25.)。「若い娘っ子たちは群がり襲われ (bedrängen) やられてしまった (verkrechten)。もし彼女たちがそれを欲したり同意しなければ、誰かがそんなことを仕出かしたら、私はそいつらを罰するようにさせただろう」 (C. 375)。これに対して同日のクニッパードルリンクの自白では、「王のヤンが若い娘を犯す発頭人であった。そこからこんなことが始まったのだ。」 (C. 379) 説教者ヨハン・クロプリスの自白もある (1535. 1. 29 MUS. S. 122)。「ミュンスターでは年頃になっていない娘も妊娠できるのかどうかということが問題になった。それに対して、年頃にならなくても妊娠できるはずだと聞いたという言葉が流れたので、彼女たちも結婚できることが認められた。」これら 10~14 才などの少女に対する凌辱や女医の努力について、ドルピウスはこういつている。「これら 18 人の少女たちを、司教によって市に派遣された時に見た」と書いている (Dörpius. S. 242)。

グレシュベックによると、「預言者、説教者、十二長老たちはこう考えた。ある男が老婆や乙女をもち、子が産めなかつたら、産むことができる別の女を妻にしなければならぬ。これは神の御意志である。この女が妊娠したならば、分娩するまで夫は彼女と交わりをもってはならない。妻が子どもにかまっているが、夫はかなりの間、女なしには我慢できないなら他の女と交わってよろしい。妊娠したら彼女を家に居させなければならぬ……彼らが地を満たさんがために、もちただけたくさんの女をもつてもよいのだ (G. 60)」。こうしてヤン・フォン・ライデンたちは、14万4千人の天使の軍隊を生産するという神話でそれを正当化した。だが各家の中では当然のごとく阿修羅の状況が発生した。グレシュベックはさうのべている。「この結婚制度のおかげで市の中では人々は折り合うことができなくなった。女性たちの間ではもつと大きな不和があった。なぜなら、二・三人の女が一つの家にいっしょに住み、一人の男をいっしょにしていたからである。女の間にはつねに叱つたり罵つたりする声があがっていた。最初の妻がいつも夫の傍に居るような場合、その夫がつれてきた他の女たちがその夫の傍にいようと、最初の妻がやっているのと同じようにその男に対して振る舞おうとした。それで彼女たちは仲良くすること

ができず、いっしょに決して平和を保てず、一日中、預言者や説教者や十二長老たちに不平を訴えにやってきました”(G. 65)。ポリガミー反対で蜂起し処刑された指導者モルレンベックの息子は、落城直後証言し、「男を持つとしない若い女性はローゼンタール監獄（旧女子修道院）に入れられ、同意するまで留置された”(G. 65f)。「自分以外の妻を連れて来る夫に抵抗した本妻もそこに投げこまれた。結局、先へのべたように一人の夫をめぐる複数の妻の争いは処刑をもつてしてもおさまらず、離婚を認めることで、かなり鎮静化することになる (G. 66)。

最後にコルネリウスがある短文で説教者ヨハン・クロプリスのことを書いて、理由ものべずに彼の好人物ぶりを賛めているが、なぜだかよくわからなかった。ところが彼の取調官に対する自白を見てわかった。彼はボン大学神学部を出て、ヴァッセンベルグの説教者になる。ホフマン流の再洗礼派の影響を受け、ミュンスターに行き、さらにヤン・フォン・ライデンに命じられて、オルグとしてネーデルラントに行くが捕われて処刑される。その訊問記録では、かつてヴァッセンベルクではコンクビーネであったやさしい妻ヴェンデルとの間に4人の子ができていた。彼はポリガミーに反対だったが声を挙げることはできなかった。一夫多妻制が始まると説教者も多く妻をとらなければならなかった。市の中心的な説教者で宗教改革の音頭取りであったロートマンはヤンに次いで9人の妻をとった。だが彼は一人もとらなかった。心配した妻はある夜、サラがアブラハムに示のように若い娘のグリエットをそと彼のベットに入れておいた。次の夜もそうだったが、彼は一切手をふれなかった。この娘を magd のまま掃した、と訊問官に語っている (NUS. 134)。彼もまた再洗礼派の説教者として間もなく火刑にされた。もっともクロプリスもこういっている。「夫は婚姻の妻を去らせ、他の女をとることができ。パウロはコリント書第7章でもし彼女が信仰を捨てたならそれができると書いている」(NUS. 122)。もっともパウロはそんなことは書いていない。「不信仰のほうに離れていくなら離れるにまかせよ」といっている。

第5章 試論的問題提起 誰がいかなる意図で一夫多妻制を導入したのか

以上長々と論じてきたが、ここでは資料的裏付けが極度に困難な仮説を提示してみたい。

キルヒホフを始めとして、ミュンスター事件について誰一人傭兵のことに触れている研究者がいないということである。私はグレスュベックを読んでいるうちに彼の叙述の中に到るところ傭兵が顔を出していることが気になった。そのうちミュンスターをめぐる戦争で傭兵のひじょうに奇妙な動きとか動かせ方というようなものに気づきだした。グレスュベック自身、家具職親方であるはずだが、まともにそれをやっていないで様々な貴族に仕えて傭兵として戦争に出ている。たまたま母を訪ねて家に帰ったとき、1534年2月27日の強制再洗礼とそれを拒む者の市外追放に出くわすのである。それで彼はまさかこんな戦争が起きたりこんな再洗礼派が権力を握っているとは考えもしないで、再洗礼を受けてコミットすることになるが、彼にとってはいい傭兵アルバイトの口が見つかったと思っていたのであろう。日とともに、これは大変だ、気違いが権力を握って市民たちを洗脳しだしている。だが逃げ出すにはもう遅いと、毎日臍をかむ想いで生きてきたことであろう。

ところで彼の記録の中には、味方の傭兵と敵の傭兵が出てくるが、すべてそれは Landsknecht と呼んでいるので、彼らが置かれている状況を見て判断しない限り、敵か味方がよくわからない。さらに驚いたことに、戦闘がない時には、敵の土塁の上に行って、敵の傭兵と味方の傭兵がお喋りをしている。そして DAT WORT IS FLEISCH GWORDEN UN WANET IN VNS という言葉を刻んだ 8~9 グルデン銀貨で敵の傭兵を味方へと釣り上げようとしているのだ²³⁾ (G. 48)。自分たちは貨幣を廃止したといいながら、ヤン・フォン・ライデンは馬鹿な敵の傭兵を味方に結構釣り上げた。彼らは市内に入ると、再教育場に連れて行かれ、再洗礼主義を教えこまれるということになる。そして、敵の捕虜を喜んで市内に置き、敵陣で起っていることを描かせたピラを撒かせている (G. 57)。軍律は厳しく、酔払いの傭兵の扱い方さえ教えている (G. 58)。八路軍と蒋介石軍のような違いがあった。1534 年の夏から初秋にかけて、ミュンスター再洗礼派は最も強力になった。キルヒホフは次のように書いている。「1534 年 3 月ブリュッセルのハプスブルグ政府は、ミュンスターでは 800-900 人の武装能力ある者しか残っていないと思っていた。しかし秋になると市から送り出された説教者のオルグたちは逮捕訊問されると、どれもこれも、かなり一致して 1600 人と自白している。すると新たに成年男性数は 700-800 人、さらにそれに倍する女性たちが市にやって来たといえる²⁴⁾。」確かにその通りだが、敵の投降傭兵も戦力に加えるべきであろう。グレシュベックはこういつている。「1534 年夏、再洗礼派は市内においても強力であり、軍事力をもってしても容易に獲得しえないほど強力に市を握っていた。今や傭兵たちが市に投降しない日はないほどであった。この頃オランダ人やフリースラント人が日夜市にやってきた。彼ら再洗礼派ははじめて充分強力になったのである。」(G. 58. 59) また投降傭兵たちはよく働いた。市を攻略するためには濠を埋めなければならぬと、包囲軍は農民や傭兵を使って濠埋め作業をさせたが、市内に投降した後は、彼らはすすんでその土を引上げてくれるわけである。彼らは自分が棄てたところはよく知っていた。8 月 31 日の第二回総攻撃で千名の戦死者を出した司教軍の志気は沮喪沈滞した。続々投降者が出てきた。このころオランダ人やフリースラント人が大量に市に入って来る。「ミュンスター市内にはひじょうにたくさんの人々がやって来て、一軒の家に 6-8 組の人々が住むことになるし、一台のベッドを四組の夫婦が使うことにもなる」(G. 96f)。ドーム広場(シオンの山と彼らは称していたが)で全市を挙げての聖餐式が開かれたが、グレシュベックの概算では、「戦闘能力ある男は 1500 人以上はいなかった。女性たちは老若合わせて 8-9 千人。(G. 107)」もっとも 10 の市門を守る警備兵の数を加えると 1600 を超えることになる。ランベルティ教会の塔の見張りは、投降しようとする傭兵の群を見ると、トランペットを吹くか、突撃の鐘を鳴らして味方に合図し、彼らを防いでやるのである。秋が深まるとともに兵力は時とともに減少していった (G. 161)。投降してくる包囲軍の傭兵が時とともに減少し、逆に包囲軍に救いを求める脱走傭兵が市からころげ落ちていったからだと思える。包囲軍の方もスパイとして市内に傭兵を入れた。司教も再洗礼派が傭兵を釣るのを真似て、投降と見せかけてスパイをたくさん入れた。彼らは市内攪乱のため暗殺を行ったり、情報収集をしていた (G. 90)。お互いに情報は筒抜けになっていたと見るべきであろう。

ヤン・フォン・ライデンの期待は、オランダや低地ドイツの「各地で八千から一万の、いやできるだけ多くの傭兵を集め、彼らに月に 4 グルデンを与え、聖俗諸侯や貴族を襲撃させ、勝手に奪うに委せる

こと²⁵⁾」もしそれが成功すれば、ミュンスターから出撃してその軍と合流することにあつた。その合流のためヤンは市内でなん台もの車陣を作製させ訓練を行わせている(G. 104f, 123ff)。これも不可能なら、抵抗を長びかせることによって司教財政を破綻させて手を引かせるか、応援出兵している諸侯軍をあきあきさせて引上げさせるかしかなかつた。しかし、それよりも早く食料が底をつきはじめた。また包囲軍は、材木で頑丈に造った堡壘と堡壘との間 200m ぐらいに二重三重の深い塹壕を掘り、そこに歩哨を歩かせて、全く外界との連絡を絶切ってしまった。飢餓はいつそう加速された。もはや市に投降してきた傭兵にとって市はなんの魅力もなくなってしまった。だが市から逃れ出る者の運命は決まっていた。双方から殺されることを覚悟して、城壁から濠に飛びこみ、向う岸に登り、真暗な土塁の中をなんとか転げ落ち、逆茂木に刺され、這い上がってみれば、司教側の歩哨が待ちかまえていて銃で撃たれるか鉾槍で刺し殺されるかするのが落ちだった。それでも逃亡ははじめて群をなして行われだした。それでヤン・フォン・ライデンも休暇を取りたい者は勝手にとれ、その前にラートハウスに來いといって、ボロボロの古着を着せて出さした。毎日十人、二十人、三十人、四十人、五十人と市から去って行った。あまりの多さにヤンは休暇を今後はさせない、脱走者は直に投獄処刑すると宣言した。市外に出た者たちは敵味方の間の空白地に転がって敵の傭兵が憐れんで食物を投げよこしてくれるのを待ち続けた。傭兵投降者についていうならば、もうどちら側も彼らが必要としなくなった。市にとっては投降者は喰わせなければならぬ厄介者にすぎないし、包囲軍にとっても、もう役立たずで、縄張りの中に入って来たらいとも簡単に射殺した。グreshuebeckが殺されなかったのは彼が包囲軍に発見されたのと同時刻のその日の朝から、殺すなという布告が出たためであった。落城は不可避で間近かだと、包囲軍は悟ったからである。

以上延々とミュンスター再洗礼派王国について語りながら、本稿の中心テーマはなんであるかを、ここまで伏せておいた。その理由は、ある仮説を提示しようと思ったが、まだ実証しえていないからである。それはどういうことかという、女性数の圧倒的多数という客観的条件、またヤン・フォン・ライデンの人を人とも思わぬ非人間性、それと結びついた恐るべき政治力や好色性という主観的条件、キリスト単性論という女性蔑視を引出す「教義」等々が変てこに結びついて一夫多妻制導入となったというように論じてきたが、それではまだ決定的なものが欠けていると考えたからにはほかならない。その決定的なものとはなにか。当時は、コミュニケーションでいえば、Flugblätterの時代であった。ミュンスター包囲陣の中には、今の週刊誌記者のような人々が、いろんな記事をデッチ上げて木版屋に刷らせて売っていた。

これを利用する手はないのか？悪知恵に長けたヤン・フォン・ライデンは、銀貨を鑄造して敵の傭兵を一本釣りしていたが、敵をして一挙に多数寝返らす方法はなにかないか、と考えたはずである。ここまではわれわれにも当然推理できるし、資料もあるが、ここから先は、絶対、敵にも味方にも洩らしてはならない秘密事項になる。推測する以外にはない。ところでOrdnungという題名の面白いFlugblätterが一つ残っている。それを訳してみよう。

「ユーバーヴァッサー修道尼院とザンクト・イリエン修道尼院に住んでいるすべての修道女はともに

男たちをとった。ユーバーヴァッサーのほうは傭兵であり、ザンクト・イリエンは農奴である（ともに単数）。彼女たちは、彼らにぞっこん惚れこんでいる。」(Kerr. 627. Detmer Anm. 1) もう一つはヨハン・ベックマン（聖マルチン教会の助任神父だった男）がオルグに出されて逮捕されて喋った自白調書。「彼は二人の妻をもっている。一人はザンクト・イリエンの尼であり、もう一人はユーバーヴァッサーの尼である。」(NUS. 36)

ところでデトマーは、このうち前のほうは怪しい、デッチ上げだ。「時間的にいって、一夫多妻制導入前の日付になっているからだ。後者は正しいだろう。自白調書だからだ」(Ker. 627 Detmer Anm. 1)²⁶⁾。

では前の方の引用した記事は後世のデッチ上げだろうか。そうではなかろう。では誰かが書いて、それを Ordnung 紙の記者に渡し、印刷し売り捌かしたのだろうか。また市内で書いたとしたら、どうやって市外の記者に渡したのであろうか。誰がどんな意図で書いたのか、あるいは書かせたのだろうか。これらの疑問を裏付ける資料は全くないので推理しかない。だがもしなんらかの間接資料でも出てくれば、私の仮説は説得力をもってくることになるのではなかろうか。

では、この推理の中心人物から見ていこう。それはいわずと意思つく人物、ヤン・フォン・ライデンである。彼の野心は逮捕後の訊問調書からも見られるように、正式の王になることであった。すなわちヴェストファーレンからオランダ・デンマーク領の境にまで広がる地帯にヤン王朝を築くことであった。それが絶望的になってくると、戦費支出に苦しむ司教と和を結んでミュンスター市域内に限定された独立都市王国を承認してもらうことであった。全世界に広がる王国だと胸を張ってみせたりしたが、彼が市権力を握るとともにこの欲求が渦巻きだしたように思われる。だから、その第一ステップとして、ミュンスター包囲戦に絶対勝たなければならない。だが畑や牧場のある平地で敵と戦って勝てる自信は勿論なかった。山も林もないこの地帯では敵の騎馬隊に蹂躪され殲滅されるだけである。オランダ再洗礼派の軍事支援も知れたものだろう。諸侯が味方につく当ては、再洗礼派なるがゆえに全くない。結局濠と城壁でしか戦いようがないのだ。だが包囲されるとジリ貧になり餓死するだけだ（事実そうってしまったが）。では、こういった難局に陥らないで勝利に導くためにはどうすべきか。これがヤン・フォン・ライデンのユニークな発想なのだが、敵を味方につけることであった。あの流通能力をもたない銀貨でも結構傭兵が釣れたではないか。さらに大量に釣り上げるには、もっといい餌はないのか。ある！男の3倍以上もいる女だ。これは銀貨よりもいい餌になる。実際、彼の生涯を見ると、女性に対する人間的な思いやりなど一片もないことがわかる。すべては弄ぶ道具か金をうる手段（最初の妻）であり、少女凌辱に最初に手をつけたように、女欲しさに投降してくるたくさんの傭兵に誰彼なしに放り投げてやるエサにすぎないのだ。

当時の戦争では軍隊の宿営地の背後には、無数の売春婦の幌馬車隊が軒を連ねていた。戦闘で疲れ果てた傭兵たちは、夜そこに行つてはひとときのカタルシスを求めた。時々もらう給金はすっかり吸い取られてしまったが。ヤン・フォン・ライデンはここに目をつけたのではないだろうか。三十才にしてあらゆる悪いことをしてきた男が、そして敵を味方にするという毛沢東ばりの発想ができる男が、それに気付かないはずはない。だが、'そんなことを誰にも漏らすことはできない。一夫多妻制にして投降してき

た傭兵にも複数の妻を与えてやるなどということ、たとえ秘密の話しであれ、指導部の誰かにうちあけるならば、逆に彼の首が飛ぶことになろう。心の中に深くたんでおくしかない。だが、いったいどのような効果があるのかテストしてみたいという好奇心に駆られて彼は先の文章を書いたのではなからうか。短い文章だが、傭兵たちの好奇心をそそる見事な出来だ。イスラム教信徒が死後行くはずのコーランに書かれている極楽のようなところである。処女である尼僧たちにぞっこん惚れられているとは、戦場で雨風に曝され土塁の中に潜んで寝ている傭兵にとって、まさしく夢のような天国だったはずだ。ヤンはおそらく投降した傭兵を使って、この紙を敵陣にいる傭兵に渡し、金になるからと Flugblätter の記者に渡したのであろう。ヤンが時々投降した傭兵を市内の集会に呼びだして、その首をなぜか理由もいわず斬ったが、それは市民に対する脅しだけではなく、秘密漏洩を防ぐためではなかったろうか。ケルセンプロッホによると、市内で一夫多妻制が始まるや否や、包囲陣内ではその話しでもちきりになったといわれている。

確かにヤン・フォン・ライデンの計画は成功した。一夫多妻制反対派も制圧し処分した。投降者は先にのべたようにどんどん増えていった。だが、多数の女性は男たちにみんな既に分け取られ、投降した傭兵にまでたくさん廻ってこなかったのではなかろうか。またより決定的なことは、包囲軍がしだいに強化されていき、敵味方、傭兵同志の交流もなくなりだしたことである。市内から走り来る者も、市内の方に走る者も、ともに撃たれだしたのだ。

従来、このポリガミーの研究は美辞麗句を連ねる文体のものが多く、内容に乏しかった。一夫多妻制にした理由はよくわからないと多くの論者は告白している。私は、キルヒホフの多くの優れた研究に敬意を表しながら、彼に欠けている政治戦略的動機を考えてみたのである。

註

(1) 20世紀初頭、ミュンスター再洗礼派研究の代表的人物であったハインリッヒ・デトマーは次のように書いている。「再洗礼派が公然とポリガミーを実践したことは今日でもなお理解不可能に思われるだけでなく、これが信じがたいほどの混乱を惹起したことを知るならば、今でもなお憤激させられるほどのものなのである。」Heinrich Detmer, *Über die Auffassung von der Ehe und die Durchführung der Vielweiberei in Münster während der Täuferherrschaft 1904* S.6 今もって多くのドイツ・アメリカの研究者たちは、これと同じ言葉をくりかえしている。

(2) 外に送り出された女性たちは敵陣の中に收容させてもらえず敵陣と市の城壁の間の Königreich と俗称される中間地帯に放置され、草を摘んで食べながら餓死したり、あるいは包囲軍の傭兵のモノにされたりした。この惨状を、帝国都市の代表として参加していたフランクフルト市長 Justinianus von Holtzhusen は父やフランクフルト市参事会にあてた6通の手紙によって伝えている。この事件関係の資料の中で、彼のこれらの手紙だけが現代のヒューマニズムに通じる気高い心情を吐露しており、哀れな彼女たちに対する深い同情の念を誘ってくれる。C.A.Cornelius, *Berichte der Augenzeugen über das münsterische Wiedertäuferreich*, S. 334, 341, 349, 353, 355, 361 (以下、本資料集をCと略称する。)

(3) Dale. J. Grieser, *Seducer of the Simple Folk: the Polemical War Against Anabaptism (1525-1540)*, 1993 p. 367f は当時市外で出廻っていたパンフレットを用いて、次のようにそれを詳しく描いている。「ヤン・フォン・ライデンは、市から去るチャンスを一回だけ与えた。この申出は圧倒的賛同を受けた。大群衆がマルクトプラッツに集まってきた。とくに婦人と子どもが。しかし彼らにも侮辱と受難が待っていた」(Wahrhaftige Berichte A3F)。そして次のように書いている。「市から出て行こうとする者や、また市に留まりたくない者たちは、王にその旨を告げなければならなかった。王にこれに対してその者にしるしを与え、出て行けるように取り計らおうとした。すると大量の女たちや娘たちや子どもたちが、王の許に申し出に来て、市から出ていくことを欲した。彼は彼女らからあらゆる物を奪い、一枚の着物だけを残した。そしていった。さあ異端者ども邪宗徒のところへ行け……女・子どもは市から去ったと、受難が終わったわけではなかった。彼らは再洗礼派だけでなく包囲軍の犠牲者でもあった。彼らは司教軍の線を通過することを許されず、二つの線の間で生きるように断罪されたのである。彼女たちはそこで草や葉っぱを食べ、多くの者は飢え疲れて死んでいった。この Zeitung を書いている記者にとっては、司教軍は再洗礼派より文明化されているとはいえなかった。この Wahrhaftige Berichte を書いている匿名のパンフレット記者は、この地帯を歩き続けて次のように語っている。すなわち、彼女たちを公然と殺さないで彼女たちの数を減らそうとするならば、市壁の外に敢て出ようとしぬ男たちは幸福だったと。あらゆる男の逃亡者はすぐ殺され、城壁の上にその死体が曝された。彼女らが市壁と塹壕との間の広い空間にやって来たとき、そこに止まらなければならなかった。塹壕を通って堡壘のところに行くことは誰にも許されなかった。遂に彼女たちをやっとそこから去らせたとき、彼女たちの多くの死体が発見された。飢餓のために死んだのである。しかし傭兵や男たちが市からやってきたときには、彼らは皆な刺し殺され市の周りの刑車の上に置かれた。同 A3r (投降者であるにもかかわらず一訳者註)

(4) cf. K. H. Kirchhoff, *Berichte über das münsterische Täuferreich 1534/35 in einer Hamburger Chronik*, Westfälische Zeitschrift Bd. 131/32 1981/82 SS. 191-195

(5) K. H. Kirchhoff, *Die Täufer in Münster 1534/35*, 1973, SS. 22-26 キルヒホフは驚くなかれ、この包囲戦で死んだ者(戦死、病死、餓死、処刑について男、女、子供)の数まで割出している。但し、外から流入して来た再洗礼派については、捉えられていない。資料が全く残っていないためである。市民の戦死者の数は驚くほど少ない。指導部により内部で処刑された者の数のほうが多いくらいである。

(6) ミュンスター再洗礼派王国で女性が多かった理由としてポー・チア・シャーは次のように的確に説明している。「それには二つの要因の結びつきが説明される。第一は、安全性の不安で、男は去ったが、女は安心と思って家の財産を守るため残されたこと。女性はいっばんに政治的抑圧の標的ではなく、また再洗礼派の支配も短い幕間劇で、近隣の町に逃避を求めている間に終わってしまうだろうと思っていた。第二の要因は、ミュンスターの人口構造で、前近代の市と同様に女の数は男をかなりしのいでいた。男の死亡率は高かった。さらに単純労働をしている女(糸紡ぎ、寡婦、若い給仕女たち)は、市の人口の中では、はっきりとした最下層の集団をつくり、その数は多かった。彼女たちが市役所の慈善の対象者であり、小屋に住み、ごく僅かな税金を払っていた。彼女たちはたとえ欲しても、市から逃げ出しても

行くところがなかった。1534年2月27日再洗礼が全住民の義務として宣言されたとき、しかたなしに再洗礼派になったのである。Po-Chia Hsia, *Münster and the Anabaptists*, pp. 58-59, in ed. by Po-Chia Hsia, *The German People and the Reformation*, 1988 筆者はこの指摘を肯定するが、女性のほうが男性よりはるかに新しい宗教に対する感受性が強いことがあげられなければならないと思っている。

(7) Heinrich Dorpius, *Wahrhaftige historia*, 1536 in hrsg. von R. Stupperich, *Schriften von Evangelischer Seite gegen die Täufer*, 1983 S. 234

(8) *idid.*, 235

(9) 例えばミュンスター市西方20kmぐらいのところにあるCoesfeldの市民が、托鉢修道僧たちのいじきたない生き方に抗議して司教に出した1533年6月17日付の手紙の一節を引用しておこう。Josef Niesert, *Münsterische Urkundensammlung 1826 SS. 198-201* (この資料集はよく引用するので、NUS.と省略する)「……15年来、説教職は托鉢修道僧たちによって握られています、その司牧職たるや、あまりのケチぶりに多くの市民によって全く軽蔑されています。またこずい手段を用いて金を集めることも市民はみんなよく知っています。年次収入は先輩たちによって十分に確保されてきているのにもかかわらず、お金を出さない限り秘蹟を執行したり、子どもを洗礼したりしません。貧乏人には婚姻の秘蹟を行わないし、キリストの体と血の秘蹟も彼らに対しては執り行おうとしません。支払うことができないものは監獄に入れ、彼らが保証人を立てるまで釈放しません。彼らの意見によると、誰に対しても死者ミサは行いますが、贈物が僅かな場合は軽蔑して突返します。稼ぎに役立つ職務濫用をこれ以外にもたくさん行っています。尼さんたちはワイン酒場の給仕人で、市民の収入に損になるようなことをしています。聖職者たちは市民がやる夜警や城壁工事の義務から免れています、橋や市壁に必要とする僅かな税金すら払おうとはしません。」なお同時代史として、この再洗礼派王国を描いたものとしては、Hermann A. Kerksenbroch の、*Anabaptistici Furoris Monasterium Inclitum Westphaliae Metropolis Evertentis Historica Narratio* (以下Ker.と省略する)という長大な千ページにもものぼる再洗礼派王国の同時代史があるが、カトリック聖職者たちの職務怠慢や無能ぶりについての箇所は意識的にひどく省略している。彼は再洗礼派を若い日にギムナジウムの生徒として、じかに見だし、彼らと少々戦いも交え、市包囲の時は外から陥落さす日の一日も早からんことを願っていた。やがてミュンスターのギムナジウムの教師となるや、この事件の資料を集めて大著を書いたが、あまりのカトリック的偏見の強さのために、資料や評価を歪曲しすぎて、現代ではほとんど使いものにならなくなっている。但し、この書の脚註を19世紀末に苦勞して付けたHeinrich Detmerの仕事は大いに役に立っている。

(10) 彼らのキリスト単性論については筆者は、以下のものを参照した。

1. Karl Deppermann, *Melchior Hoffman, Soziale Unruhen und apokalyptische Visionen im Zeitalter der Reformation*, 1979

2. Peter Kawerau, *Melchior Hoffman als Religiöser Denker*, 1954

3. *Bibliotheca Reformatoria Neerlandica Geschriften uit den Tijd der Hervorming in de Nederlanden, Vijfde Deel: Nederlandsche Anabaptistica* (geschriften van Henrick Rol, Melchior

Hoffman, Adam Paster, De Broederlicke vereeninge) rewerkt door S.Cramer 1909

(11) Die Schriften Bernhard Rothmanns, bearbeitet von R.Stupperich, S.227 (以下、本書をRSと略記する)

(12) Dorpius, S.223, また Urbanus Rehgus は Widderlegung der Münsterischen neuen Valentianer und Donatisten bekentnus 1535, Hrsg. von Stupperich, Schriften von evangelischer Seite gegen die Täufer S.106 というパンフレットを出してロートマンに対し次のようなピンクル的な批判をしている。

「さてわれわれはベルンハルト(ロートマンの名)とそのサンタラ預言者に問いたい。諸君は以下のようなことを、どこで学んだのか。すなわち、マリアはアダムの子である。アダムは罪なる肉である。それではイエス・キリストがマリアからその肉とをつたとするならば、それもまた罪だ。ではどうして、われわれは罪人の肉によって罪から救われるというのかと。」

(13) 拙稿「ミュンスター千年王国前史(八)」政経論叢第54巻1,2,3号54-62ページを参照されたい。

(14) *ibid.*, Dorpius, wahrhaftige historia S.238

(15) C.A.Corneliusのクロプリス評“Historische Arbeiten vornehmlich zur Reformationszeit”, 1899, S.97f

(16) *op. cit.*, NUS, S.134

(17) *ibid.*, S.135

(18) Max Geisberg, Die Münsterischen Wiedertäufer und Aldegrever, 1907, S.13ff

(19) *op. cit.*, NUS, S.122 „Sagt er(Jan von Leyden), Es were bie jnen die Lere, das Got ein solch Reich wult anrichten, welches vber alle die Werelt sult herschen.”

(20) Dorpius, S.243

(21) K.H.Kirchhoff, Das Phönomen des Täuferreichs zu Münster 1534, 1989, SS.392-394 in Der Raum Westfalen Bd.6

(22) G...Meister Heinrich Gresbeck's Bericht von Wiedertaufe in Münster, in Hrsg. von Cornelius, Die Geschichtsquellen des Bisthums Münster. Zweiter Band. Berichte der Augenzeugen über das Münsterische Wiedertäuferreich. S.79

(23) 10年前の大ドイツ農民戦争のころの傭兵のMonatssoldは平均4グルデンであった。それは有能なHandwerkerの月々の収入に匹敵したという。Cf.Heinrich Pleticha, „Landsknecht Bundschuh Söldner, 1974 S.18

(24) Kirchhoff, Die Täufer im Münsterland, Westfälische Zeitschrift B.113, 1963 S.28

(25) Geständnis von Heinrich Graes(2. Jan.1535), in Hrsg. von Richard von Dülmen, Das Täuferreich zu Münster 1534-1535 S.215

(26) なおこの二枚のFlugblätterは、興味深いのでよく引用されている。最近ではDale J.Grieser, Seducers of the Simple Folk: the Polemical War against Anabaptism(1525-1540) UMI Dissertation Services 1993 及びSixteenth Century Journal XXVI/1(1995)にも彼が書いた“A Tale of Two Convents:

Nuns and Anabaptists in Münster, 1533-1534”でも用いられている。但し、それぞれの修道院の管理人の男が、彼女たちを妻にしたとしているが、それは (G. 165) を無批判に引用したものといえる。ユーバーバッサー修道院は、ミュンスターでいちばん格の高いところで、土地貴族の娘たちが入っていた。1534年2月の大事件が勃発したとき、再洗礼派の活動家になっていたミュンスターラントでも指折りの名家たる Von der Recke 家の知性の高い長女と次女の修道尼を引取りに来た母親と三女は、長女と次女のすさまじい糾弾を浴びて降伏し、この修道院に泊りこみ、再洗礼を受けてしまった。陥落後、夫は司教に五千グルデンを払って四人を引き取ったが、次女は再び再洗礼派に投じ、行方をくらましてしまった。こういう階級が全然ちがいがいい気位が高く知性も優れている母子四人を管理人が自分の妻とすることなどとても考えられそうもない。別の修道女ではないか？

補 論

I. 一夫多妻制に関する諸説の紹介

日本ではよく知られていないこのテーマについて、本論文では多くのドイツやアメリカ・カナダの研究者の説を紹介したり引用したりすることはできなかった。ここに補足として、それぞれのいわんとする主眼点を抜出して訳出したい。またミュンスター再洗礼派のイデオログたる Bernd Rothmann がポリガミーをどのように弁証したかについても、その主眼点を訳出しておいた。

(1) Klaus Deppermann による Melchior Hoffman のキリスト単性論解釈 Klaus Deppermann “Melchior Hoffman, Soziale Unruhen und apokalyptische Visionen im Zeitalter der Reformation” 1979

「言葉は肉となった Das Wort ist Fleisch geworden」はミュンスターの再洗礼派の戦闘的スローガンとなった。彼らは貨幣や認識票にこの言葉を刻んだ。だがこのキリスト単性論ではキリストの人格を高めたが、実際にはイエスの形象は意味を失うことになってしまった。第一人格と第二人格とは互いにもつれ合ってしまうからである。ミュンスター再洗礼派はホフマンに従って、ただ第一人格たる父のみに祈り、子に対してはお祈りをしなくなった」(S. 201)。

(2) デッパーマンによる Sjouke Voolstra, Het Woord is Vlees geworden. De Melchioritisch-Menniste Incarnatieleer. Diss. 1982 についての批判。Mennonitische Geschichtsblättern 1983 「人間の生殖に関する生理学的認識の不十分さが、単性論的キリスト論の基礎づけと伝播に好ましいものであった。メンノーをふくむ多くの例から明らかになることは、16世紀には、胎児の胚は男からのみ生じ、男の精子と女の卵子の結合を通じて生じるものではないという見解が広がっていた。それで女は受胎にあたって純粋に受動的役割のみを演じ、種が播かれる肥えた畑と同じだとされたのである。」

(3) Hoffman の Römerbrief G8b によると、「性行為それ自体は罪ではない。それを通じて世代から世代へと罪が遺伝するわけではないからだ。」Deppermann ibid., S. 198

(4) 「言葉は肉となった」ゆえに、永遠の言葉が人間の肉に変化したとホフマンは帰結した。ブツァーは「言葉は肉をとった」は「言葉は肉となった」とは一致しないから支持しがたいといった。Deppermann

ibid., S. 200

(5) 「ヤン・マチスとベルント・ロートマンは、信仰に基づく洗礼を呪術的なタウのしるし Signum Tau に高めた。すなわち最後の審判において神の恐れに対して封印するしるしにした。」 Deppermann ibid., S. 205

(6) 「ホフマンの同意をとりつけることなく、ヤン・マチスは万聖節の日、すなわちホフマンによって定められた期間が来る約1月半前に、洗礼停止の命令を取消した。この日破産した商人でかつての仕立屋 Jan Beukels (ヤン・フォン・ライデン) に出会った。マチスは、ホフマンによって預言された聖霊の新しい降りそそぎを体験し、神の啓示を受けとったと主張した。自分は黙示録の第二の証人エノクであると。また洗礼の時はまだ来ていないとホフマンが主張するならば、それは誤っている。再洗礼派に対する迫害はさらにひじょうに危険になるであろうからである。洗礼を受けることによって終末共同体を結集することが、今こそ最高の時なのである。タウの印をもたない者は、父の罰と怒りを招くことになろう」 Deppermann ibid., S. 289

(7) Bernt Krechting の訊問告白 (1536年1月20日ミュンスター)。「その後ヤン・マチスという者がミュンスターにやって来て父なる神は選ばれた民をめぐめさせられようとされる。タウのしるしをもたない者の上には、父の罰と怒りが下ることになろう。しかし私は誰が彼を預言者にしたのか知らない。また私はメルヒオール・ホフマンという者を知りもしないし、見もしないし、聞いたこともない。」(C. 405) ベルント・クレヒティンクはミュンスターラントの北方にあるショッピングのガウグラーフで、ミュンスター再洗礼派王国に参加し、ヤン・フォン・ライデン、クニッパードルリンクに次ぐ三番目の権力者であった。彼もこの二人とともに処刑され、教会の塔の上に吊された。

(8) 「イエス・キリストは真の生きた神の子であり、神の永遠の言葉であり、それを通じて天と地が創造されたのである。イエス・キリストはまたあらゆる罪のない完全な人間であり、マリアによって受胎されたわけではない。」 Joseph Niesert, Münsterische Urkundensammlung I. Urkunden zur Geschichte der Münsterischen Wiedertäufer, Coesfeld 1826 S. 159 この抜粋された文章の筆者は Jacob Huffschmidts von Osnabrück といひ再洗礼派の説教者としてオルグに出され逮捕された者。上の文はその訊問記録の一部。

II. ミュンスター再洗礼派のイデオログである Bernd Rothmann のキリスト単性論。

(1) これはポリガミー導入前に書かれた Bekentones des Globens und Lebens der Gemein christe zu Monster (1534) からの引用。

「法王派、ルター派さらにこの国民の大多数は、キリストはマリアの種からつくられた、その体はマリアの肉から受けとられたと知っている。こんなことを信じることはできない。……聖書はヨハネ福音書 I : 14 でこう知っている。「言葉が肉となったのであって、マリアの種が肉となったのではない」 Das wort ist fleich worden, nit Maria sat. マタイ XVI : 16 では「お前はキリストである。生きた神の子である。」ヨハネ VIII : 25 「私はお前たちと語っている者である。すなわち永遠の生きた神の言葉である。」

……キリストはマリアの肉であったというように誤って考えられ、そこから信仰の基礎がデッチ上げられ、色々な迷信が発生したのである。われわれが信じるのは、唯一のキリストであり、彼はマリアの肉や血から生じたものではなく、信仰箇条でのべられているように、聖霊によって身ごもられ、処女マリアから生まれた方である。マリアは彼女自身の血や肉でキリストを身ごもったのではなく、聖霊によって、すなわち生きた神の言葉によって身ごもったのである。そして神の生きた言葉は肉となり、われわれのうちに住むのである。……もしわれわれのために死んだのがマリアの肉であったとしたら、われわれはそこからどのような慰めや勇気をうることができようか。」 Hrs. von Stupperich, "Die Schriften Bernhard Rothmanns" 1970 S. 199

「神は人間を最初に創り給うた。男と女である。両者は聖なる身分へと合一される。二人は結び合わされ、一つの肉とならなければならない。誰もこのような合一を切離すことはできない。従って、神によって結び合わされたもの以外の結びつきは……結婚ではなく、神の眼の前では売春である。

夫婦像のモデルは、キリストとその聖なる花嫁すなわち信者たちの結びつきである。キリストとそのゲマインデが互いに気をつけ合い、ともに住むように、彼らは主にあって結び合い家を保つ（エペソ人への手紙）」 (S. 204)

……夫婦の一方が信仰者であり他方がそうでない場合、信者は不信仰の相手に縛られない。自由である」 (S. 205)

「われわれはプラトンのあるいは Nickelamch のような女の共有を互いにやっているというひどい罪をなすりつけられている。まるでわれわれが血縁の絆など守らないのかのごとく。だが、それはすべて嘘でありデッチ上げである。」 (S. 205)

(2) ロートマンの結婚観は一夫多妻制の強行的導入から、くるりと変わってくる。1534年10月、彼は *Restitutio rechter und gesunder christlicher Lehre* を出版して、一夫多妻制を擁護する。因みに、彼はヤン・フォン・ライデン（15人の妻妾をもった）に次いで多い9人もの妻をとった。

「結婚の乱用は禁止される。たとえば間男は禁止される。誰も他人の妻と寝てはならない。なぜなら生めよ殖やせよにならないからだ。また他の理由もある。売春も禁止される。それは子を生むことにならないし、肉の快楽が追求されるだけだから。第三に破廉恥な猥褻も禁止される。それは自然に反しているからだ。第四に以下のことも罪とされる。すなわち、誰か弱虫が自己自身に燃え上り、あるいは床の中で己を汚すことである。なぜなら、神の祝福や贈物は、そのために用いられるべきではないからである。それは神の祝福や贈物の不正使用である。さらに妊娠している女や不妊症の女と交わってはならない。これらの乱用あるいは不純行為は聖書で禁じられている（創世記 I. 28）だけでなく、自然の法にも反し、従って「生めよ殖やせよ」という結婚の法にも反しているのである (ibid., S. 261)。

「男は神の栄光である。神は女を男に従わされたので、女は夫に対してうやうやしく服従し、彼を自分の名誉としなければならない。そして彼のみを慕い、彼のいうことを聞かねばならない。彼女らのうやうやしい服従を通じて、男は名誉ある者と見なされる。第一コリント書 11 の 17 に書かれているように、妻は夫の名誉である。そして彼女は他の誰のいうことも聞かず、だまされないようにする。蛇にや

られたようにはしない。……神が男の上に立つ主人であるように、男は妻の上に立つ主人である。さらにパウロは妻をもった信仰者の夫とキリストのゲマインデとを比較して、キリストとそのゲマインデとが群をつくっている場合のように、夫と妻とは互いに折り合わなければならないといわれた。」

(ibid., S. 262-263)

「さて結婚における男の自由とは、一人以上の女を妻としてもちうることである。以下これについて語ろう。第一に多産であることは神の祝福である。だが御意志以外にその賜物を用いようとするいかなる者も祝福されない。すなわち、神に服従している子どもを産むことのためだけでなく、それ以外のことに自分の精子を使用することである……このため男は一人以上の女を妊娠さすように神によって豊かな賜物を与えられているのである。そして男は神の命令のゆえにそうするのである。だから、この賜物を濫用するな！彼は一人以上の妊娠可能な女たちを妻とすることは自由であり、いや必要とされているのである。結婚しないでいることは、神の御意志や神の法に従うことではない。そして結婚しないで女を知ることは姦通であり、売春である。「生めよ殖やせよ」と神は命じられ、これとともに妊娠さすことができる彼自身の自然の精子を他のものにいれないように命じられた。そして妊娠している女や妊娠できない女を知ることも当然ながら公やけに禁止された。また生まれながら知っているのか、知らないでいるのかかわからないが、無駄に精子をばらまくことを禁止されている。……また必要から次のようなことも生じることがある。すなわち一人の妻と純粋に生活できるよりも、神によりより豊かに祝福されている者が、必要上、一人以上の女をもつことも罪を犯すことではない。」(ibid., S. 264-265)

「神によって明確に禁じられていることは、『汝らはいかなる畑にも二種類の種を播いてはならない。』(レビ記XIX-19)……自分の精子を快楽のために無駄に用いるならば、われわれの下では正しいことではない。」(ibid., S. 266)

「妻たちはいたるところで支配権をもっていて、熊使いのように夫を使っている。そしてどこの世界でも姦通、淫行、売春に溺れている。」(ibid., S. 268)

「神にとって心地よいことは、各々がその持場に立つことである。男はキリストの下に、女は男の下に恭々しくしていることである。男は女の上に立つ自由な主人であり、また主キリストの無私の奉仕者なのである。」(ibid., S. 269)

Ⅲ. マチアス・ヘンニツヒの研究史的問題提起 Mathias Hennig, Askese und Ausschweifung zum Verständnis der Vielweiberei im Täuferreich zu Münster 1534/35, Mennonitische Geschichtsblätter Nr. 35 1983 SS. 25-45

「再洗礼派の禁欲主義は歴史的に積み重なってきた具体的な悪弊の批判につきるものではなかった。そればかりでなく突如として闖入してくる終末への希望と結びついたこの世とその秩序に対する端的な断絶を意味しているのである。このような社会的に根なし草にされた者たちの千年王国的終末論的教義への方向転換は社会心理学では普遍的に確認されうる構造パターンといえる。もしわれわれがイエスの倫理が教会史のある種の起源となったことを神学的に理解しようとしなければ、ラディカルな宗教改

革派的禁欲の第二の源泉としてこの終末論的動機づけを真に正当に評価することはできないであろう。

ミュンスター以外にも宗教改革の時代、結婚の規制、売春行為の制限の普遍的傾向が確認される。ヤン・マチスの到来以来、倫理的厳しさは上昇し、再洗礼派の影響下、禁欲主義はますます極端になりつつあった。これまで道徳性の昂揚が行われてきたが、今や「古きアダムの死滅」が目標となった(NUS. 131)。大喰い、ガブ呑み、女郎買いなどのあらゆる享楽は全く拒否さるべきものであった。1533年の教会訓練規則は、姦通者は八日にわたって、ただパンと水だけで地下牢に入れられることで済んだが、1年後、再洗礼派が権力については十二長老布告で姦通は死刑ということになった(Kers. S. 394, 433 usw.)。公認の売春婦はこの布告では全く言及されていない。そこからいえることは、どこにでもいる売春婦はすでにすっかり除去されていたといつてよいであろう。処女を騙した者は、モーゼ五書に基づいて彼女と結婚しなければならない……まさしく他のドイツの都市に例をみないような禁欲的な倫理的訓練と厳格さが立ち現れていた。ところが、ミュンスター再洗礼派王国では突如たる結婚形態の変化によってガタガタになる。この天のようなイエルサレムは全く違った光の下に立ち現れてくることになる。この再洗礼派支配の終りに至るまで、みだらで放縦な姿をそこに刻印づけることになる。この極端から極端への移行をどのように説明すべきなのか。禁欲的な厳格な掟と淫らな非道徳性の並存、入り交りをいかに有意義に解明することができるのか。この両極対立は折り合うことができるのか。この問いはミュンスター研究の頭痛の種となってきた。」以下彼は数論文を批判的に紹介する。

Richard Dülmen, "Reformation als Revolution" 1977 S. 324f による一夫多妻制導入の根拠の説明。「女性数の過剰とヤン・フォン・ライデンの個人的欲望がポリガミー導入の重要な前提であるが、真の原因ではない。家父長的家族共同体という旧約的理念が決定的な根拠なのだ。そこでは結婚している女も未婚の女も男の権力の下に立たなければならない。この女性の従属が、ロートマンの「キリスト教的結婚の回復」によれば、神の意志に照応し、同時に家政の上に基礎を置いた社会における男の支配とかつまた全住民の扶養と支配をも保障するのである。他方、男と女の婚姻共同体はもっぱら子どもを生むためにある。……それゆえミュンスターではポリガミーは状況に、すなわち宗教的心理や支配構造に最もよく照応した結婚形態として提示されたのである。同時にそれは市の急激な人口増大の実現をも可能とした。その際、黙示録の14万4千人という数も少なからざる役割を演じた。ポリガミー導入に当たっての預言者、説教者、十二長老の共同声明がこのことをよく示している。「生むことができない若すぎる妻や老いた妻をもっている男は、生むことができる他の女をとることも神の御意志であろう。この女が妊娠すると、出産するまでこの男はこの女と関係してはならない。女が赤ん坊にちやほやして相手にしてくれず、それで女なしで時間を過ごすことに耐えられなくなったら、他の女をとってもよい。彼が彼女をとり、彼女が妊娠したならば、傍に置いてやれ。男が女たちを懐しむことができなくなったなら、もちただけ多く女をもつてよろしい。こうして世界を満たすのだ。」Rothmanns Schriften S. 264

Karl-Heinz Kirchhoff, Das Phänomen des Täuferreiches zu Münster 1534-35 in "Der Raum Westfalen" 1989 SS. 277-422(とくに SS. 392-394)、「一夫多妻制導入の原因追及は Keressenbroch から始まるが、彼のようにヤン・フォン・ライデンの無軌道な欲望の追求という一言で片付けるわけにはいかない。ロート

マンのずる賢い純潔性の保持でも不十分である。144,000人の聖者の軍隊をつくるためといっても信じる気になれない。一つの答えは、この都市社会の中で一人者の女性の数が抜きでたくさんいたことである。一人の女を一人の男の庇護の下に置くにはあまりにも多すぎたのだ。これは夫が市にいない夫人また夫が背神の徒や異教徒とされるすべての夫人は再婚する義務があるとされたことにも示されている (G. 60. 72f)。グレシュベックはこう伝えている。あらゆる女は男をとらなければならない。『処女であれ下女であれ未亡人であれ妊娠できるすべての女は、貴族であれ市民であれ聖職者であれ世俗の者であれすべてだ。老女たちも保護する旦那 Schirmherr を求めなければならない。彼は彼女の生活を自分の家計から支出し、彼女に正しい信仰を教えなければならない (G. 68f)。』1535年の1月2日のヤン・フォン・ライデンのいわゆる『箇条書』は売春や姦通などの性的非行を禁止している。また男が三日三晩帰って来なかったら、妻は別の男を夫にしてよろしい (第13条) としている。市外で死んだものと見做しうるからであると。1535年1月5人のオルグをネーデルランドに送ったときも、その妻たちはラートハウスに呼び出され、6週間しても帰って来なければ、夫たちをあきらめるつもりはあるかどうか質問された。妻たちが同意すると、夫たちが帰還予定日を二週間過ぎても帰って来なければ、他の男と結婚してよろしいといわれた (NUS, 136)。

これまでの結婚の原則の廃止に対して再洗礼派ゲマインデの中から強力な抗議が発生した。それは1534年7月末鍛冶屋モルレンヘッケの指導下公然たる蜂起となった。また個別的にも拒否行動が生じた。蜂起は打倒され、反抗する女性は投獄された。さらなる不満の種を取除くため、ラートハウスに行って記名することで、女性たちにも離婚する余地も開かれた。但し、強制的結婚と男の不能の場合に限られた。ゲマインデの乙女や少女たちが啜かされたり強制されたりして、彼女たちと結婚したがっている男に従わされたが、そのうちのなんんかの少女はまだ結婚能力がなく、肉体的傷害を蒙ったという情報は、再洗礼派の野蛮性の証拠として多くの文献の中に記載されている。実際一夫多妻制導入の際、若い娘の結婚の問題は真面目に討議された。たとえば Jan Klopriß は1534年10月ミュンスターを去ってオルグに行かされたが、逮捕され、その自白によれば、まだ月のもをもたない娘も結婚しなければならないかが問題になった。しかし、「ある男が、まだその時が来る前に妊娠した娘がいるといったので、彼女たちが結婚することを許した」(Ker. 628 Detmer. Anm. 1)。これによって彼らが婚姻外的な出産を避けようとしたのか、あるいは出生数上昇の可能性を利用し盡くそうとしたのかは、わからない。

1534年夏、包囲された市の中で独身の女性が多数いることは、社会的経済的・道徳的な問題になる危険性があったと考えられるし、若い娘の結婚についての決定も実行されたことだと思われる。ふつう処女や未亡人の結婚は両親乃至は後見人の同意なしにはできなかつたので (訳註。こんな同意を必要としていたら、一夫多妻制は成立たなかつたはずである。キルヒホフはどういう根拠でこう書いているのだろうか?)、ここで問題になるのは、若い娘についていうならば、外からやって来た親のいない若干の若い娘だけである。彼女たちは他の夫人同様、再洗礼派の教義によれば、夫の家計のやりくりと監督の下に従わされることになる。それとともに男女間の性的な罪を犯す機会も減少した。子どもに対する性暴力の可能性は、「万人信者」の誠実さというユートピア信仰の中では問題にもならなかつた。

なお残る問題は、若い娘たちを結婚さすよう指示を与えた責任者は誰かということである。クニッパードルリンクは訊問で、発頭人は王であるといったが、これに対して王は次のように反駁した。若い娘たちは結婚するように強制されたこともないし強姦されたこともないと。1534年10月中旬捕えられた再洗礼派の「使徒たち」(オルグ)の自白を通じて、若い娘を結婚させていることは包囲軍に知れ渡っていた。ケルン大司教の指令書は、男と交わるように強制されている14才以上の女の子について語っている。同じ資料を報道しているパンフレットは、12才以上のすべてのJungfrauenやMaidleinは結婚させられていると書いている。脱走者W.Scheiffartは1534年12月、まだ年頃に達していないひじょうに多くの娘のことについて語っている。そしてZillis Leitgenは1535年2月、12人のこういった若い女の子が女医さんのところにいるのを見たを告白している。

Dorpiusは1536年になって次のように強調した。再洗礼派の肉欲は多くの女の子を死へと導いた。10才から14才までの子を彼らは犯したのである。彼女たちの多くはそれが因で死んだ。自分は彼女たち18人が女医のもとにいるのを見たことがあると。グレシュベックも後に同じことを書いている。ケルセンブロッホも11才から13才までの処女たちのうち多くの子が死んだと書いている。また16人が女医の家にいるのを人が見たともいっている。

再洗礼派ゲマインデは、以前の彼らの理想主義的立場からは予測できないようなこうした乱行を同意もしなければ、沈黙もしなかった。勿論広く知られていることだが、罰しもしなかった。だが、別れた女のリストにこの子たちも記名することは許されていたのである。(G. 67, 73を見よ。)

以上のように、キルヒホフはかなり再洗礼派に甘すぎる判断をしている。

James S. Stayer, Vielweiberei als "innerweltliche Askese", Neue Eheauffassungen in der Reformationszeit, in Mennonitische Geschichtsblätter, 37Jg. Nr. 32 1980「ミュンスターやそこから生じた運動の中にあつた一夫多妻制は、特殊メルヒオール派的再洗礼主義を信奉しているという独特の歴史的状況の下にあつたということを別とするならば、宗教改革を通じて行われた人間のセクシュアリティや女性の性に対する積極的評価に反対するところの禁欲の精神から生じた反駁なのであつた。彼らの乱淫乱行という現象像にもかかわらず、彼らの一夫多妻制はマックス・ウェーバーの「現世的禁欲」や急進的宗教改革の独自性の一例をなしており、それはまた制度化されつつあるプロテスタンチズムの秩序に批判的に投入された保守的思想であり、宗教や社会を根本から脅かす異論となつたものであつた。」(S. 24) 現世的禁欲という概念について、日本の研究者たちの一般的理解と全くかけ離れた理解をしているが、ステーヤーはついで古代からルターにいたるまでの性の理解について、アウグスチヌスから始まり、宗教改革期までの思想家や諸運動について、手短かだが興味深い説明を続けているが、それは省略する。

ついでメルヒオール・ホフマンの「キリストの天の肉」を紹介しながら、それが影響を与えたミュンスターの一夫多妻制及びメンノー派の結婚忌避に入っていく。「両者の場合、禁欲的な教義は既存の社会秩序をはねつけるラディカルな行動と手に手をとって進んでいく。ミュンスターの一夫多妻制は、後のモルモンに見られるように、指導者の人格に見られる肉欲的根拠をもっている」(S. 31)。妻を捨て、ヤ

ン・マチスは醸造屋の美しい娘の魂を奪って自分のものにし、ヤン・フォン・ライデンはガミガミ屋の年長の女房を放ったらかして、次々にオルグ先で女に手をつけ、マチスが死ぬと彼の美しい妻を自分のものにし、やがてミュンスター王国の王と王妃になることを語り、ついでステューヤーは一夫多妻制の成立根拠を次のようにいう。「一夫多妻制はまず第一に圧倒的多数の女性によって解き放たれた圧力に起因し、第二に家族の絆の集団的解体によって、第三には鞏固な社会的構造を造り出して包囲されたこの都市の抵抗を継続させ生きのびることであった。おそらく次のことも付加えることができよう。すなわち、一方では死をほとんど確実に予期せざるをえないと感じつつも、他方では背神の徒に対して復讐が行われるべき主の目を絶望的に期待していたことである。だがこれらのことは、ミュンスター再洗礼派王国の中への一夫多妻制導入を説明する必要充分条件ではない。それ以外にもラディカル宗教改革と一致するような宗教的イデオロギーを必要とする。ベルント・ロートマンはミュンスター王国の最も重要な文書『再興』の中でそれを提示するのである……「使徒後の1400年の教会墮落の歴史の中で結婚の目的も正しく理解されていなかった。『神は命じ給うた。生めよ殖やせよと。』そしてただそれだけであり、快樂のために夫と妻は神の祝福を用いてはならない。それゆえ妊娠中の妻や不妊の妻と交わってはならない。彼女たちと交ることは神の命令に反することになる」(Hrsg. von Stupperich, 264)。」結婚にともなう本来の損失とは次の点にある。すなわち、生命を提供する男の精子がなんらかのやり方で浪費されてしまうことである。すべての良心的な夫と妻は不妊期間の間、性交を控えることは誤りであることを知っている。控えすぎることは、単婚夫婦に押しつけがましく迫ってくる残酷な要求なのである(ibid., 264)。さて結婚における男の自由とは、一人以上の女と結婚することである……この男の自由と対になるものは夫のために用意しておく妻の義務である。ルターはもし妻が婚姻上の義務を拒んだならば、その妻を処刑することが聖書にかなっているかどうかについて、時として熟考していた。ミュンスターでは、このような熟考は血なまぐさい現実となってしまった。」(S. 33f)「ロートマンはミュンツァー同様に、性交は子孫を生むために奉仕すべきものであって、卑しい感覚的快樂のためでないことを強調した。ヨハネ黙示録の14万4千人という選ばれた者たちは、いずれの日にかこの市に結集して市を開放するであろうという希望は、生めよ殖やせよという命令の遂行をとくに緊急のものにした。一夫多妻制と女性蔑視は、このラディカルな禁欲主義の突出した特徴であった。それは包囲された「ミュンスターの1534-35年の状況にもっともよく適合したものであった」(S. 34)。一夫多妻制もメノー派の結婚忌避も、動揺する男女の関係を、それぞれ固有のやり方で新たに考え抜き秩序づけんとする野心的な試みであった。両者ともにいえることは、メルヒオール派的再洗礼派は、禁欲的伝統をひじょうにラディカルな理想主義に奉仕させんとしたのである(S. 37)。

W. J. Bakker, Bernhard Rothmann: Civic Reformer, in Irvin Bunkwalter Horst (ed): The Dutch Dissenters-A Critical Companion to the History and Ideas, 1986 ヤン・フォン・ライデンが権力のハンドルを握ることができた手段は、ポリガミーの制度によってである。セックス・結婚は最初からメルヒオール派にとって強迫観念であった。そして運動内部で女性が圧倒的多数を占めていたことが、キリストに対するゲマインデの宗教的な服従と夫に対する妻の性的服従とを一体化させる、あるいは少

なくとも混同さすことに関係があった。戦争は性的モラルを掘り崩す傾向があるが、再洗礼派がこのような傾向から免れていたと想像する理由はないし、しばしば危険に直面して恐怖に性的表現を与えることが見られた。再洗礼派の下でのミュンスターでは、女性が男性に対して、3対1の多数であった。そして姦通姦淫は、この聖なる都では重大な犯罪であったので、ポリガミーはゲマイデの中に一人者の女性たちの性的必要を合法化する唯一の方法であった。かかる必要を最もよく知っていたヤン・フォン・ライデンは説教者との数日にわたる濃密な討論の後、1534年7月23日の一夫多妻制導入を布告する。この後、間もなく叛乱が起るが鎮圧された。この叛乱鎮圧に女性たちはとくに積極的に参加した。そしてヤン・フォン・ライデンに挑戦するあらゆる可能性は失われた。彼は数週間後に王位についた。説教者たちの抵抗も克服された。(編者註。これまでの研究者は女性の性的必要について誰もふれていなかった。但し、この論文は強調しすぎて、他に証拠が残っていないケルセンプロッホの文章をもってきて、一夫多妻制を支えたのが女性たちであつたような印象を与える。)

2. ヤン・フォン・ライデンの二つの自白調書

1535. Juli 25. Bekenntnis Johannis von Leiden, in Carl Adorf Cornelius, Die Geschichtsquellen des Bistums Münster zweiter Band, Berichte der Augenzeugen über das Münsterische Wiedertäuferreich, Münster 1895(本文ではCと略称している。また()内の数字はこの資料集の中のページを示す。)

(1) 第一回 25. Juli 1535(C. 369-379)

(369)ミュンスターのいわゆる王なるヤン・フォン・ライデンの自白、1535年7月25日デュールメンにて、ケルン・ミュンスター・クレーフェの顧問官たち、すなわちマンデルシャイト、アンプロジウス・ファン・フィルムンデ、ヨーリエン・ウレーデ、ツヴィスト及びゲールツ・ファン・シェーリック、ヴァハテンドンク、ヨハン・ファン・ローエとレーデ

上記のライデンのヤンなるものはいかにして生まれ育つたのか。彼の父はBockelといい、ライデンの近くのゾーエンファーフェン村の助役(onterschollet)である。彼の母はミュンスター司教領ホルストマーの傍で生まれ、アリスといい、彼の父のもとに7年間住んでいた。そして彼の子ヤンを生んだ。いっぽう、彼の妻はその時なお生きていたが、その妻の死後、ヤンの父はヤンの母を連れて教会に行った。その後ヨハンはライデンの学校に行き、またそこで仕立職を学んだ。ついで彼はそこからイングランドに行き、4年間滞在し、さらにフランドルに行った。仕立職を磨くためである。それからライデンに戻り、ある女と結ばれた。彼女は以前船をもっていた。彼はそれからリスボンにはじめて行き、ついで商売のためリューベックに移った。だが再び帰って来た。(370)商売をすっかりすってしまったので。彼はミュンスターに行こうとした。彼の妻はこう反対した。「お前さんはまだ食いつくしたいのかい。商売がすってんてんになつたくせして!」だが彼女の意志に反してミュンスターに行ってしまった。その地で神の言葉が最も崇高によく説かれていると聞いたからである。しかしその時は再洗礼をうけなかった。そ

の時には、1533年のヤコビの日まで Hermann Ramert の家に泊まった。(彼については Kirchhoff, Die Tauffer in Munster 1534/35 S. 213 Nr. 540 を見よ)。そしてまた郷里に帰った。その後、万聖節のころライデンの仕立屋コルネリウスの家にヤン・マチスがやって来た。ついで彼の家にも滞在し聖書について教えこんだので、彼はマチスによって洗礼を受けることになった。その後、このマチスとメルヒオール・リンクやストラスプールにいるホフマンとは再洗礼について意見を異にしていた。再洗礼はまだその時ではない。これまで行われたことがないほど弾圧を激化するからだ。メルヒオールはいったが、これに対してヤン・マチスはこう答えた。人は真理に対して妨害することはできない。続行すべきだ。その後、彼はマチスによって、ノイハウスのグリット・ツーム・クロースターとともにブリルやロッテルダムに派遣され、そこに再洗礼を導入しようとした。そしてグリットは説教し、どこでも8人から10人以上を洗礼した。しかし彼はある二ヶ所以外では誰にも洗礼できなかつた。すなわち、ブリルではコルネリウス某とロッテルダムではヨハン・スコットという者に洗礼した。それから二人はふたたびライデンに帰り、そこで8人か10人以上を再洗礼した。皮革職人(ヴォルデンへ行く門の前に住んでいるコルネリウスといったと思う)とアルントという縮充工、学校教師のヨースト、自分の妻と二人の女性及び二人の下僕。その名前は想い出すことができない。その後、先にいったグリットと彼はアムステルダムに行き、ついでホルン、エンクハウゼン、アルクマールに先にのべた人の命令で出かけて行き、父と子と聖霊の御名により、頭の上に少しの水を施して、みんな再洗礼した。(371)グリットとヤンは再びライデンに帰って来て、ヤン・マチスの命令により、いくつかの知らせをし、仕事を行うため、ミュンスターに出かけていった。そこには1534年1月の顯現日のころ到着し、まずベルント・ロートマンや説教者たちのところに行き、ヤン・マチスが彼らに命じていることを伝えた。すなわち、教会ではもう説教壇の上で説教しないこと、教会堂を完全に廃棄すること、妻は夫を尊敬し、彼らを御主人 Herr と呼ぶこと、その他若干の小さなことがあったが、忘れてしまった。二人はミュンスター市内で教え、再洗礼した。その後、家具職人の妻が預言していった。ここにいるキリストの兄弟たちは間もなく解放されるはずであると。その後でベルント・クニパードルリンクが気狂いじみた恰好をして叫びはじめた。それは二週間も続いた。「悔い改めよ、悔い改めよ！」そしてヤン・フォン・ライデンのところにも走ってきた。彼もまた叫びだした。これらすべては心の衝動と感情の苦しみのためであった。以前も彼はショッピングでそういうように自分自身に駆りたてられたことがある。もし悔い改めなければ、剣を使わないでも市から追い出されるに違いないと。

その後間もなく、枝の主日(復活祭直前の日曜日)ごろ、ヤンはクニパードルリンクの書齋の中に座り書いているとき、ある幻視が生じ、ある者がやって来てヤン・マチスを突き刺すのを見た。それで彼は大変驚いた。ある声も聞えてきた。「静まれ！私がヤン・マチスを通じて成し遂げようとしたことをお前が成就しなければならぬ。そしてヤン・マチスの妻をお前がとれ」。彼はさらに驚き、このことをクニパードルリンクに話し、こういった。「この幻影がほんとうであるかどうか見ることにしようじゃないか。こんなことがいったい起るかどうか。」それから八日後ヤン・マチスは突き刺された。そして彼はクニパードルリンクの下女を自分の妻にしていたが、聖ヤコブ祭日(7月25日)ヤン・マチスの妻を自分

の妻にしてしまった。そして今や、結婚は自由であるべきだと宣言したのである。

(372) それに対して市の全住民は非難し、一週間以上も逆らったので、彼は聖書をもって教へ論そうとした。そしてこの市の説教者たちもそれを(一夫多妻制)を布告した。それから間もなく、ヴァーレンドルフの鍛冶屋であったヤン・ドゥーゼンチュアが立上り、市が厳しく包囲された後、人々に向って策謀をめぐらし、各人は自分の財産やお金、宝石装飾品をゲマインデに差出さなければならない。自分が持っている大きいのも小さいのもすべて隠さず、自発的に差出すべきであるといった。人々は一致してそれに同意した。

彼らは次のことをよく意識していた。すなわち彼らの中の一人が立上がるはずだ。彼はゲマインマンを指導し統治すると。ヤン・フォン・ライデンは心の大きな苦しみをもって証言するにいたった。自分は民衆の上に立つ王であり、それゆえ聖書を読みぬかなければならない。そして主が次のように語られているのを見出したとき、すなわち主が「私は最後の日に私の下僕ダヴィデを目覚めさせるであろう」云々、彼の心はますます苦しくなり、自分にそれをさせて下さるように主に願った。もしそうするわけにはいかないならば、何か別の預言によってそうさせて下さい。すなわち自分がみずからいったり誘ったりしなくても済むように、そして人々がそのような幻影が本当であるのか嘘なのかがわかるようにして下さい。このことは自分の心の中に留めて、他人には決していわなかった。それから間もなく、先にいったヤン・ドゥーゼンチュアがゲマインデの中で立上り、こういった。ヤン・フォン・ライデンなる者はお前たちの王であり、お前たちを統治するはずである。そして説教者たちがその聖書をよく読み、それを発見したとき、それを彼らはゲマインデの民衆に布告し、彼らは彼を王と見なし受け入れることになった。そして王国に属するあらゆる職務が制定され任命され、また彼の妻で、ヤン・マチスのかつての妻であった女が女王に任ぜられた。

その後、モルレンヘッケという者が傭兵や市民約二百人とともに蜂起し、服従することをもはや欲せず、王政とともに自由な結婚制度を排除しようとし、(373)王やクニッパードルリンクや幾人かの説教者を捕えた。包囲が最も厳しくなりだした時である。しかし朝になると王やクニッパードルリンクの子分たちは堡壘のところに集り、武器を手に入れ、逮捕されている者たちを釈放し、その代りに彼らを入れた。王は罪ある者約48人の首を斬り無罪の者を釈放した。彼らが布告しかつ受入れられた命令や法を侵す者は、男も女も剣をもって罰したのである。彼の妻の一人もこの理由で罰せられたのである。かくして彼は最後まで王でありつづけた。

この王国の最後の時期、十二人の侯爵が任命された。市を十二に分け、それぞれその一区画について指導してやるためである。

市が占領されたとき、彼はザンクト・ユリエン門(王妃の門といわれたが)へ走った。しかし、またそこから走り逮捕された。

彼は貴族、侯爵、諸都市、家臣の者たちとはいかなる結びつきももたなかった。二百グルデンを路銀としてもたせてやったハインリヒ・グラエスは、ネーデルランドやいたるところにいる兄弟たちを連れて来て、あなた方を解放しましょうといった。そしてヒエロニムス・ムリンクという名の男とゾースト

のヘンスケンという男に託した手紙では、復活祭のころキリスト教の兄弟たちが彼らを解放するはずである。以前あなたは預言し、もし解放が生じなければ自分の首を斬れと自ら進んでいわれたが、解放が生じることを確信していただきたい。しかし復活祭がやってきたが、解放が生じなかった時、それは内的に霊的に考えていたのだといった。

彼らは傭兵や民衆を雇うため一銭の金も送らなかった。なぜなら、(374)キリスト者は傭兵を集めて、雇うため金を送ってもよいかどうかを説教者に質問したところ、聖書を調べて、ナインと答えたからである。だが諸侯や貴族か誰かが彼らのところにやって来て、彼らを雇いたいといった場合は別であると。

王は自分の手で7人か8人の首を斬った。

手紙、印章、特許状、記録簿その他書籍や受領証は蜂起した日にヤン・マチスの命令でまず第一に燃やされた。それは、すべての物は共有であり、いかなる所有もあつてはならず、誰ももはや人より以上にもらうことを期待してはならず、ただ神にのみ委ねなければならないからである。

彼らは二人の者を派遣した。一人はヨハン・フォン・ゲール Geel で、もう一人はゲッセン Goessen といった。彼らはオランダやヴァッサラントの兄弟たちにこういうように命じられた。すなわち、自分たちは送られてきた。自分たちのもとには預言者たちがいて、こう預言した。彼らは諸君を通じて解放されなければならない。彼らは用意して出かけていった。預言されていなかったら、彼らはここに残っており行かなかっただろう。

第一回攻撃で彼らのうち50人が戦死した。

彼とクニッパードルリンクの間には不一致が生じ、クニッパードルリンクは統治は霊と証しから行われるべきであり、聖書から発してならないといい、自分は王と同格であろうと欲した。だがこれは王や民衆に逆らうものであり、その後彼らは大損害を蒙ったので、人々は彼が罰せられず放置されてはならないということになった。それでクニッパードルリンクは監獄に入れられ、白状するまでそこにいた。

彼らは決して市を放棄するつもりはなかった。実際まだたくさん食料があった時には彼らは最後の一人にいたるまで戦う気でいた。彼らがなお十人もいれば市を持ちこたえようとしただろう。

(375)彼はこういった。自分は他の人より以上に食料をもはやもたなくなり、自分の民を食料やその他の必需品で救ってやりたいとつねに願っていた。そのためには自分の持物を売払い、それで死んでも仕方がないと思っていた。

民衆は同盟を結んだり、秘密組織をつくったりしなかった。

子殺しや子を食べるなどということ、あるいは蜂蜜に毒や生石灰を入れるということについては、自分は知らないといった。そんなことは起きなかったと確信している。

妊娠した妻たち同志はつねにいっしょにいた。男たちはそこにやって来たが、彼女たちのもとで時間をすごすことはなかった。

王はあらゆる兄弟たちを等しく信頼し、分け隔てしなかった。

結婚は二、三人の彼らの兄弟の出席のもとに、「お前さんは私と一緒にになりたいかい。私はお前が欲しい」という言葉で始まり、もし自発的に「はい」といえば結婚は成立する。それで結婚式は終る。それで

済むのだ。

デュッセルドルフで逮捕されているハインリヒというヤンの宮廷にいた下僕は、以前ミュンスターにいた。そして包囲の中で、こちらに潜り込んできて、宮廷付下僕となり、彼の着物をつくったりしていた。

ビンに毒を入れたり、シュトゥーテンベルント(ロートマンの渾名)を通じてに起ったといわれているようなことについては知らない。

若い娘が無理強いされたり、暴行されたりしたことはない、ただ彼女たちがそれを欲したり、同意したりした場合だけだ。そんなことをしたならば、彼(ヤン)が現場でその男を取り押さえたり、罰したりしたはずだ。

しかしくニッパードルリンクは知っている。発頭人は王だと。

ヤンはこういった。使徒の時代より現在まで真理のよりよい認識をもっているのは、自分を措いて誰もいないと。

市がもし占領されないで彼らが握りつづけたなら、司教に対してその領土を保障してやり、(376)彼らが市を保持して、それにふさわしい官職を与えられたかったとヤンはいった。

神はこの世を罰せられんと欲せられていたがゆえに、自分たちはかかることを起し、成就せんとした者にほかならない、と彼はいった。

(2) 第二回 Bekenntniss Johanns von Leiden C. SS. 398-402

ミュンスター 1536年1月20日

いわゆるミュンスター王と称するヤン・フォン・ライデンの告白 拷問を加えることなく行われた。

(399)1533年万聖節のころ、ヤン・マチスという者によっていろいろと教えられ、ついてライデンの自分の家で彼によって再洗礼された。

ヤン・フォン・ライデンはホラントでは誰にも再洗礼を施さなかった。ただミュンスターに行く途中、ショッピンゲンで行った。自分が再洗礼を受け入れたのは、それによって救われるだろうという理由からだ。

メルヒオール・ホフマンについてどういふように理解をしたかと聞かれて、見たこともなければ、一通の手紙をもらったこともないし、彼に書いたこともないといった。それでは、彼の洗礼やキリストの受肉について、あるいは sacrament やルターに反対する自由意志論を読んだことがあるかと聞くと、それらは一般向けに書かれているものであって、ミュンスター市あてに書かれたものではないといった。

上述のホフマンはミュンスターにいたことはない。彼らは彼や彼の弟子たちからいかなる情報も得たことはない。

ホフマンとヤン・マチスとの洗礼の時期についての論争に関しては、彼は全く知らなかった。ただ噂だけである。

ヤン・マチスはお上に対する剣や暴力の使用を導入し、人々に要求した当の本人であるが、彼は王では

なく、彼はいかなる反乱をも説かなかった。

どうしてヤン・フォン・ライデンは預言や予測をするに至ったのか。市の解放を預言している。彼はどんな形で啓示を見たのか。彼はこう答えた。自分はとくに預言したことはない。ミュンスター市の指導者が神の言葉の下にとどまることによって、彼らはいかなる苦難もうけないはずである。今でも自分はそう思っている。かかる不運に見舞われたのは、それは彼ら自身の罪に責任がある。だが彼が父御自身の声を聞いたり、何らかの天使の幻影や顔を見たということはない。

彼が王になるということも秘かに打合わされていたのではないかとヤン・マチスが彼をそのように公表するはずではなかったのか。ちがう！最初彼の心の中で生じたことである。そして彼はドゥーゼンテューアといかなる相談もしたことはなく、(400)秘密の申し合せもしなかった。

どんな再洗礼派をネーデルラントに送ったのかを聞かれて、誰も知らない。デートリヒ・ツーム・クロスとかいうベントハイム伯爵領から来た男のことだけは聞いたことがある。彼はホラントで多くの者を再洗礼したそう。彼もまたミュンスターで死んでしまったそう。

誰かと申し合せをしたことはない。ただ聞くところによると、かなり多くの者が田舎で再洗礼をしだしているということだ。

ヨハン・ファン・ヘーレン Johan van Geel をミュンスターから送り出したのではないかと、誰に向けて送ったのかと問うと、こう答えた。彼が自ら欲したことだ。自分は誰に対しても特別な任務を与えたことはない。自分はミュンスターで、ヴェーゼルのオットー・フィンクが洗礼を受けたということを知り、ヨハン・ヘーレンはヴェーゼルに行ったのだなと思った。そして『復讐について』というロートマンの本をもって行って広めたのだなと思った。

彼らが集まっているぞと聞いた兄弟たちに対し、ヘーレンはこう語りかけたそう。すなわち、ミュンスターのようにわれわれの間でも預言者をもとう。ミュンスターに行き市を解放することが神の命令だと。彼らはどんどん進んでいった。だが彼らの中からいかなる預言者も現れず、神の命令もなかったため、中止してしまい、こちらに来なかった。なぜなら彼らは都市や諸侯や貴族や人間的な慰めを捨て切れず、神にのみ頼もうとしなかったからである。神が彼らを助けられるならば、彼らも助けられただろう。神が彼らから去られたならば、彼らは苦難を受けなければならない。

ミュンスターに手紙を送ってきたヒエロニムス・ムルリンク Mullinck を彼は知らない。クレヒティンクもクニッパードルリンクも同じように知らないといっている。

彼らはイギリスについてのいかなる情報も持っていない。ただ再洗礼派はイギリスでは受入れられているそうということである。この情報は二人のオランダ人がミュンスターにもらしたものである。

(401)彼はクニッパードルリンクの家である幻視が浮んできた。自分は槍でヤン・マチスを突き刺す、そして彼の妻を自分の嫁にするという大それたものであった。このことをクニッパードルリンクに知らせた。それ以前自分にはそんなことはなにも意識せず考えもしなかったし、いかなる悪巧みも用いたことはなかった。しかし、その後ヤン・マチスは敵によって突き殺された。だから自分が謀んだものではないことがわかって。自分はヤン・マチスの妻と申し合わせたり、了解し合っていたこともない。また彼の

死以前に彼女に対して特別の愛着をもっていたわけでもない。

ベルント・ロートマンが呪術や禁じられている技を使っているなどと聞いたこともない。彼の敵がそういつている以外に、そんなことを聞いたことはない。彼は神の言葉を説き教えていたということしか自分はなにも聞いていない。

要するに、自分は、ミュンスターの内外で自分や他の誰かによって用いられたような秘密の申し合わせやかさまのずるい取引があったなどということ全く知らない。彼らの希望や慰めはすべて神に向けられているのであって、人に向けられているのではない。かつてテーブルを挟んでロートマンとクレヒティンクの間で論争が生じた。われわれのところでは kreichsfolck (傭兵のこと) を受入れることは聖書に照らして許されるかどうかという議論である。これに対して説教者たちは話し合い、市参事会館でこういった。金でいかなる人も受入れてはならない。しかし、みずから進んでやってきた者をわれわれは受入れなければならないし、受入れたいのだと。彼らは必死に抵抗したが、仕返すことはなかった。

彼らは包囲の間いかなる食料もその他の物も市の中で受取るということではなかった。但し、誰かが逃げこんできて、一片のチーズやパンももってきた場合は別だ。

包囲の前後に脱出して、彼らの大義を推し進めようとし、人々に支援を要請した者は誰かという問いに対して、人間として信頼できる者として送り出した者は、先にいったヤン・ファン・ヘーレン以外にはいない。(402) たしかになんらかの者たちがやって来て、われわれはこの苦しみを耐えることはできない。われわれの友人たちのところに行って、できるかぎり最善をつくしたいといった。しかし、彼らがどうしているのか、ヒリンクス・ロリウスやその他の傭兵以外には知らない。包囲陣の中でなに行われているかを知るためには、誰も調べに行かす必要はなかった。日々包囲陣からこちらに人々がやって来ていたので。

オルグに派遣された説教者や預言者にドゥーゼンテューアは金貨をもって行かせて、こういった。父の御意志だと。

彼とロートマンとクニッパードルリンクは他人に対して互いの間で秘密の申し合わせをしたことはなかった。

誰もなんらかの策略のために送り出すということではなかった。彼らは互いの間で特別のしるし、秘密の合言葉や合図ももたなかった。

財宝がどこにあるのか、自分は知らない。

彼はフィレ・ファイケンを司教暗殺のため送ったのではなく、彼女自身が言い立て強く希望したのである。王やその他の者はそれに反対し、それを空想だと見なしていた。

イングランドについては彼はなにも知らない。ただ二人のオランダ人がミュンスターにやって来て、イングランドでは再洗礼が受入れられているとかいっただけだ。

彼はみずからすすんで王になったわけでもなく、そうされることを欲しもしなかった。それゆえ、いかなる狡猾な協議や陰謀を誰かと計ったりしたことはない。しかし彼はなんども書いているように、金や財産や栄光や名誉のためでなく、ただ神の言葉を聞かんがためにミュンスターにやって来た。

他日、1月21日金曜日 いわゆるこの王はもう一度拷問の脅しの下で尋問されたが、以前の自白のままに止まった。

註1) ヤン・フォン・ライデンについて C. A. Cornelius は短い伝記を書いているが、調書に書かれていないところだけここに付記しておく。 C. A. Cornelius, Historische Arbeiten vornemlich zur Reformationszeit 1899 SS. 93-97 「彼は1509年に生まれたので、1535年には26才であった。」リスボンとリュウベックで産を失った後、「ライデンで居酒屋を開き、それとやらんで雄弁術の練習に出かけていた。」「妻との間には二人の子がいた。彼の家は St. Jansbrücke のそばに建っていた。そして "in die mitte lely" とよばれていた。」 Cornelius は彼の性格をこう書いている。「美男で雄弁、人に有無をいわせない男、熱狂的な強暴性、聖書に通じている、予言の後光に身につつんでいる、声や幻視との交流の中で自己の法悦状態を証明する。この男は自己の活動の数ヶ月にわたって、比較を絶したほとんど無条件的權威を行使した。」

(くらつか たいら)